

翻刻『京阪在役中随筆』

くすりの道修町資料館 佐藤 敏江

大阪府立中央図書館 八木 美恵

はじめに

原文書は大阪府立中之島図書館蔵(三三八/一三八八)簿冊一(十五×二十二cm)本文五十丁。

本冊は、因幡国鳥取藩の藩士・山崎篤允が、父助右衛門の名代として大坂警衛御手当詰を拝命した文久三年(一八六三)元旦から同年十一月十八日までの約一年間に渡る大坂および京都における業務日誌である。嘉永六年(一八五三)のペリー来航以来、幕府は海防を強化しており、諸藩に命じて交替で海岸警衛を実施させていた。安政五年(一八五八)

六月、鳥取藩は岡山藩・高知藩とともに、幕府より摂海(大阪湾)守備警衛を命じられ、以降大坂天保山(目印山)の守備についている。警衛の指揮官である番頭配下の組頭として勤務していた山崎は、通常は田蓑橋南詰、中之島にあった鳥取藩蔵屋敷から天保山御台場に出張し、異国船御用の任務に就いていたが、京都で非常事態が起こった際には京都御所の警衛にも出番している。

文久三年当時、朝廷では攘夷派が勢力を増しており、開国に踏み切った幕府は朝廷からの度重なる攘夷の要請に苦慮していた。当時の鳥取藩は、尊王攘夷思想の中心である水戸藩主の息子であり、同時に幕府の中枢にいる徳川慶喜の兄にもあたる池田慶徳を藩主として迎えており、家中において佐幕派と攘夷派の対立が深まっていた。そんな中で起こったのが、六月十四日の鳥取藩兵による英国船の砲撃である。この際、むやみに異国船を攻撃しない旨の幕命を順守する番頭・荒尾隼人と攘夷の朝命を遂げようとする岩越佐久右衛門との間で意見が分かれ、岩越が強引に砲撃した。砲弾は届かなかったが、船は逃去り、国元に知らせが届くと藩主は大いに喜んだという。攘夷派の勢いが増す中、佐幕派との対立はさらに深まり、八月十八日には佐幕派の鳥取藩重臣が京都・本圀寺で藩士・山口謙之進ら攘夷派に殺害される、俗にいう「本圀寺事件」が発生した。攘夷派の勢力が強まるかと思われたところ、その翌日には会津藩・薩摩藩の公武合体派が長州藩を中心とする尊王攘夷派を京都から追放する「八月十八日の政変」が起こり、鳥取藩は一旦幕府の意向に沿う方向へと進んでいくことになった。政変の後には、山崎ら摂海警衛の番士たちは残らず京都警衛の任に就くこととなっている。

本冊は、文久三年の情勢を伝える通達や事件が多数記録されている。それらを見ると、当時の鳥取藩内では攘夷についての藩論が不統一であり、藩としての方向性がゆらいでいるがゆえに、末端で命令を受ける立場の番士たちの職務にもその状況が多大な影響を与えていたことがよくわかる資料となっている。

参考

- 「鳥取県史 三 近世」鳥取県編集 鳥取県 一九七九年
「鳥取藩史 第一卷 世家・藩士列伝」鳥取県編集 鳥取県立鳥取図書館 一九六九年
「鳥取県の歴史 県史」内藤正中著 山川出版社 一九九七年

凡例

原本の忠実な翻刻を原則とし、旧漢字はそのまま表記した。
異体字は標準の字体に改めた。但し方(より)・メ(しめ)はそのままとした
かなの古体・変体は原則として現行の平かなを使用した。但し、江(え)・与(と)・者(は)・
茂(も)などの慣用字は、原本のままとし小字で表記した。
反復記号「ゝ」「ゝ」「ゝ」等は原本の通りに表記した。
判読不能の文字は□で、確定できなかった文字 誤字 脱字 衍字等は原本のまま翻字し、(カ)
(ママ)(虫損)等、その旨傍注を付した。
活字のない文字は□にルビで表記し、()内に文字の説明を付した。

『京阪在役中隨筆』

文久癸亥歲

京阪在役中 史簿

隨筆

文久三年亥正月元日より

一元日

昨大晦日 頭香河被為 召 大坂表御警衛詰被 仰付候趣ニ而 左之通り申来ル

一此度大坂表御警衛御手當詰被 仰付候間 此旨銃頭并組中江も通達可有候 以上

右後醍院名當

一別紙之通り被 仰付候ニ付 一手之内壯年之者相撰 明日中可被申達候 以上

十二月晦日

後醍院名當

右之通り後醍院方廻紙ニ而申来り 元日昼後早と後醍院江相組中寄合ニ而 左之通り頭迄申達ス

後醍院半左衛門 落合勝次郎 箕浦東之進 宮城権之進

佐治幾之丞 石黒弥太郎 横野半之助 佐藤辰之丞

桂 六蔵 木村次郎太夫 荒木甚平 吉田熊太

笠田楨蔵 山崎助右衛門 今村卯兵衛 右之内

横野半之助 荒木甚平 吉田熊太 今村卯兵衛

右之面と者近と年来ニも罷成り 其上疝氣ニ而難儀仕候ニ付 御断可申上候

宮城権之進 後醍院半左衛門 桂 六蔵 木村次郎太夫

山崎助右衛門

右之面とハ近と年来ニ罷成り 其上疝痛ニ而難儀仕候ニ付 忝御遣ひ被為下候ハ難有仕

合奉存候旨 即夕後醍院方香河へ申遣ス

一四日 左之通り香河方申来ル

左之面と儀御用之儀有之候間 明四日五ツ半時御月番江可被罷出候

此旨銃頭并ニ組中江も通達可有候 已上

正月三日

半左衛門名代 後醍院半之丞

落合勝次郎

箕浦東之進

権之進名代 宮城久之丞

佐治幾之丞

石黒彌太郎

同日五ツ半時御月番荒尾千葉之助殿宅江罷出ル 左之通被
其方儀此度大坂表御警衛御手當詰用意次第急と出足被 仰付旨被 仰渡候
御請左之通り

御家老御月番 荒尾千葉之介
御中老月番 白井重之進
但し今日限り
御旗頭 池田兵庫介
頭 香河伊賀
荒尾但馬

右之外御請状等江戸大坂共不入
今日箕浦東之進宿ニ而相組中寄合致し万事相談致候

私儀此度大坂表御警衛御手當詰被 仰付候ニ付 来ル十一日御国表出立仕度奉存候 此
段 御達し申上候 以上
正月 山崎篤允

私儀此度大坂表御警衛御手當詰被 仰付 来ル廿一日御国表出立仕候ニ付 人足左之通
り継通し申度奉存候 此段御達し申上候 以上
正月 山崎篤允

一人足 忝人
外ニ用意忝人
以上

皮籠者宮城久之丞江相頼 道中同道左之通り
後醍院半之丞 箕浦東之進 宮城久之丞 木村□□
山崎篤允
左之通浅井与一郎江相頼候
御渡し金 金高十三兩也



一拾日 今日御達しとして左之通り也
御月番 荒尾千葉之介

御旗頭 池田兵庫介
御中老月番 矢部能登
香河留主中 宮脇縫殿之助
組預り

以上

今日槍持相渡候

茂三郎

一十一日 今朝明ヶ六ツ時出立 上ノ茶屋ニ而待合同道 智頭江同宿ス

智頭 かぢや甚右衛門

一十二日 平福 玉田や喜三郎

一十三日 姫路 金吾

一十四日 大蔵谷

一十五日 西ノ宮

今日 中将様西ノ宮御泊ニ付御伺申上候

一十六日 西ノ宮方船ニ而大坂江晚七ツ半時到着 三田屋江下宿候所 三田屋方魚や太兵衛
へ案内致し候付魚や太兵衛へ下宿致○早速落合勝次郎江書状遣し候処 御門出時同様
申越候ニ付○荷物等其俣ニ而白木綿上着踏込割羽織ニ而御門前江参ル處 落合勝次郎 佐
治幾之丞 石黒彌太郎 佐藤辰之丞 桂修助 御門内迄罷出候 右着ニ付御門内江入 右五
人江御渡し之御小屋江一夜泊り申候

御請へ参り候所左之通り

御家老代り

安養寺丹後

三浦舍人

赤座為蔵

御使番

岩越作之右衛門
福原惣之助

伊丹造酒之助

柄本竹之助

諸嶋御目附

真田忠次郎
美田源太郎

日雇御小屋御渡しニ相成候

一十七日 右御小屋江移り申候 左之通口出ス

一御小人 耆人

右者此度家来立ニ而致御借候ニ付御渡し可被申候 以上

亥正月 日

山崎篤允○

人割場

右者出立前手人召抱無之ニ付申談し 右之手形江赤座之押切取裏判江相廻ス 右者耆詰中
銀十枚ニ而十枚を三度ニ上納致ス由也
今日御小人相渡ス

知頭郡知頭宿

平助

左之通り御扶持方請取通相認メ石井江相廻ス

如斯池田田式(イ、イ、イ)折ニ而左之通り

御渡米之通

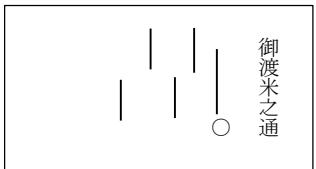
御渡し米之通

山崎篤允○

主従二人

石井十右衛門殿

亥正月十六日着



右之通り相認メ紙袋江入置毎月廿日頃遣し置事也 右者玄米ニ而六合宛之割合也 依之裏判方から臼を借シ舂ス 尤御門札ヲ遣し臼の輪を貸置事 又俵ぬかハ家来江遣ス事也 左之通り御目付江遣ス

以 手紙得御意候 弥御堅固被成御勤珍重奉存候 然者御警衛御人数御改ニ付左之通召遣イ居申候 右之段為可得御意 如斯御座候 以上

正月十七日

山崎篤允
御渡し人 平助

真田忠次郎様
美田源太郎様

山崎篤允

右之通り毎月十八日ニ者御目附江可被申達事

左之通御門札請取手形御徒目付へ相渡候

覚

一御門札 壹枚

右之通受取申候 追而返斎之節此手形与引替可申候 已上

文久三年亥正月

山崎篤允○

山瀬庄蔵殿

岡村傳之助殿

長野秀之進殿

左之通御達し致ス

山崎篤允

私儀去ル十一日御国表出立仕當表江罷越候節宿ト人足左之通り継通し申候 此段御達し申上候 以上

亥ノ正月

一人足

参人

但シ用意共

以上

昨日香河方明十七日於御殿御條目有之候ニ付可罷出候旨申聞候ニ付 罷出候様先着之者

方申聞候ニ付 今朝六ツ半時罷出ル
右御條目御目付読渡ス

左之趣出立前被 仰出候得共 到着之上写ス

其方儀此度大坂表御警衛御手當詰被 仰付候処 右ニ付而者御條目可被 仰渡答ニ
候得共 火急之出立ニ付右被 仰付立ニ相成り 御條目之趣大坂表ニ而承置候様并右
御警衛詰ニ付而者品と被 仰出候趣も有之ニ付 先輩承合候之様 且又右両様之趣相
組江も可被申聞候 以上

正月四日

一去ル十四日 御意之趣有之候而香河被為 召候趣 右写し拝見致し左之通り

昨日委細申聞候通り 攘夷御一決ニ付而者撰海防禦守衛之儀深く御案し被為在 被惱
震襟候趣度と奉伺何共恐入候義 就而者我等参 内之節も改而尚手厚候様両卿被申渡
殊非常之以 褒勅御衣之御召拜賜被 仰付不計蒙過當之 朝恩候段 後世之面目深
畏入事ニ候 猶於学習院評議之節も此方持場之儀者乍不及臣眼之黒き内者必通し申聞
敷共 安 叡慮候様申上候上者 万一持場方通り過き乗込セ、且者打破れ候節者天下之

恥辱無此上 就而者我等再ひ生て可拜 朝哉 実ニ此度之儀者各働き之擾劣智謀功拙

(4.4)

ニ依て我身命ニも預り候儀故一同格別ニ憤發 右之非常臨時与相心得 頭目者配下之面
と子之如く 親の配下之面と者頭目を親父之如く思ひ 譬以下之者足輕輕輩ニ候共 今
日以死臨戦候上ニ於て者何ぞ相違あるべきや 布而輕輩如き 尤軍際ニ出る者ニ候得者
別して慈愛を尽し可申 下と難義筋も候へ者上分尺候へ共 下を祐助可被致 猶其上ニ
も不都合之儀者勘弁可致条可申聞 過日来滞留中詰之者共武術稽古出精之様子承り満
足ニ候 猶更不致怠惰出精之様存候條者日向江も申聞置候間可存其趣也

丹後始

番頭其外

頭目組中

末と迄

邪氣一入乱毫愚弁推覽可致候

一十八日

今日昼飯後岩越作之右衛門方内と明日御陣屋江引越しニ相成候処 香河御屋敷違ひニ
付沙汰致し候段 筆頭落合江申越し候ニ付其用意致ス 右ニ付左之通り金扶持受取石井江
相廻し置

覚

豎紙

一金壹両貳歩

右者御警衛御用与して相詰候ニ付當月分御渡し金ニ而請取申候 以上

亥正月

山崎篤允〇

石井十右衛門殿

一十九日

今朝左之通り香河方申来ル

其方儀明十九日五ツ時御陣屋江引越候様被 仰付候間 銃頭并組中江も可有通達候
以上

正月十八日

今朝五半時引越し之達し相組揃之上安養寺江相達し 夫方安養寺方裏判江申遣しニ而御
徒目付下吟味等立會ニ而御小屋引渡候 相組揃て出ル 荷物者御上方御船ニ而足輕宰領ニ
老入付御陣屋迄相廻候 御蔵屋敷ニ而者其御船入方積出ス 御陣屋江者安治川江付ル 御門
札者御蔵屋敷方請取候分御徒目付江遣し 御陣屋御門札と引替相渡ス 御陣屋方御蔵屋
敷引越し之節も御陣屋御徒目付方御蔵屋敷御門札と引替之由
今日増組到着

阪田猪太 浅井又蔵 田中岩之丞 鵜沼鉄太郎

平岡権内

一廿日

左之通り申通し

此度到着之面々人別書御目付江書廻し可被申并ニ毎月廿日前夫々書廻し可被申候此
旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

正月廿日

一廿一日

左之趣被 仰出候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

正月廿一日

當表御警衛詰之面々兼而銘々之職掌も有之候処 臨時之節時宜ニ依てハ其身者請前ニ
無之向ニ而も御差図被成候儀も可有之ニ付 左様被相心得其節ニ至り 彼是論ケ間敷儀
無之様 都而頭々之差図ニ相随ひ可申旨被 仰出候
今日早昼飯相仕舞御場所見分として 香河同道ニ而銃頭初メ御組不残足輕共天保山江罷
出ル并ニ左之通り申通し

拙者儀 旗頭出張迄諸事御用向取扱被 仰付候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江
も可有通達候 以上

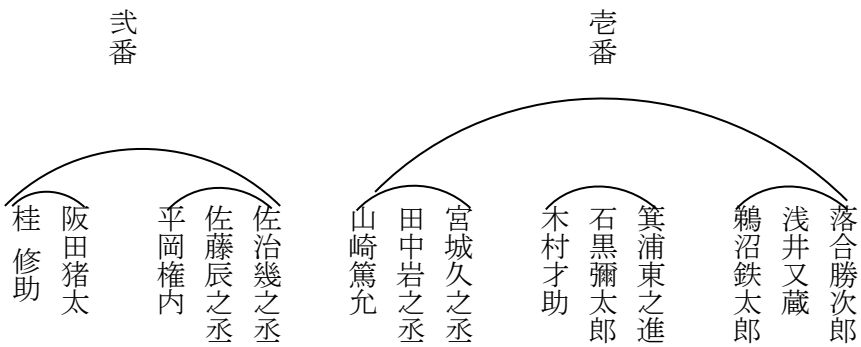
正月廿一日

一別紙之通り御番帳相改候間 左様被相心得 此旨組中江も可有通達候 以上

正月廿一日

別紙 定番之次第

後醍院半之丞



右者隔日無懈怠 當分一伍三人宛御場所可相廻 病人有之貳人方少き時者 次之一伍
 二而代り合可相勤 尤組頭者月二四度右二同道罷出可有巡見もの也

正月

右同夥割之通り三人組非番之節 御門外致し候節者 三人同道二而御門出入之事 壹人先
 江帰り候共 入る事不相成候由 假非番二而御門外致し候共 在番之組三組之内二組者御門
 外不苦 是非一組者残り可申候由

御場所廻り衣服割羽織 小袴 股引 脚半二而不苦 家来者槍を持 法被 笠を被らせ候事
 御場所廻り又私用出共 頭江出入相達し可申候事

一廿三日

明廿四日方廿五日 天神祭りニ付 兩日御門止觸ル

明廿四日於天保山実丸打試有之候ニ付 相組之内心懸有之候面とハ 今晚迄ニ申可達旨組頭
 方申通候ニ付 田中岩之丞 鷗沼鉄太郎罷出ル并ニ左之通り申来ル

明廿四日於天保山大砲実丸打試有之候ニ付 御場所廻り相見合可被申候 此旨組中
 江も可被申渡候 以上

正月廿三日

一今朝湊橋之上真中江 梟首二ツ有之候趣 是者矢張井伊江屬し候者之由也
 一廿五日

組頭方到着出立之日限申達し候様香河方申聞候趣ニ而左之通り相達し 尤到着之節香河江只今到着之段御達致し置候得共 口達ニ而者相済不申候趣也

山崎篤允

私義去ル十一日御国表出立仕 同十六日至着仕候ニ付 此段御達し申上候 以上

正月廿五日

今日御番帳左之通り改る

定番之次第

壹番

後醍院半之丞

落合勝次郎
浅井又蔵
木村才助

宮城久之丞
田中岩之丞
山崎篤允

阪田猪太
桂 修助

貳番

中村彌市

箕浦東之進
石黒彌太郎

佐治幾之丞
佐藤辰之丞
平岡権内

坪井善太郎
鵜沼鉄太郎

右奥書前之通り

一中将様姫路方京都江御引返しニ相成り申候旨 右京都方之早追として京都御目付 財原甚之進 罷出候後 當年之分金扶持今日相渡ル 尤組頭相組一統之分受取帰り 組頭御小屋江取ニ参ル

金壹両貳歩

右之通り

一廿九日

左之通申通し

當表御警衛詰之面と兼と武藝致出精候儀者有(カ)之候得共猶又此度稽古日等御二相成り依之御門出之御法も有之候得共稽古之儀者御陣屋御屋敷通行格別ニ此以後被成御免候間厳重ニ御門出入致し可申候且又左之面と義左之通り被仰付候間諸事同人江申談し格別ニ致出精候様被仰出候間左様被相心得此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候以上

正月廿九日

武藝頭取

荒尾隼人

弓術世話役

福家和左衛門

同

菅佐賀之助

同

建部半之丞

鎗術世話役

岩越述人

劔術世話役

小林幾蔵

炮術世話役

遠藤義兵衛

柔術世話役

谷口昇平

猶以稽古日割等之儀者世話役江承り合可被申且又銃頭并ニ組中江も可被申渡候以上

○二月三日

今日御飛脚到来 御国状相達ス

一四日

左之通り申通し有之

左之通り諸稽古定日ニ相成り候間左様被相心得 非番之面と御蔵屋敷江可被罷出候此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

二月四日

武術稽古御定日

弓術 日と

但し射込隔日終日之事

馬術 五日目

但し御陣屋馬一疋宛受番之事

槍術 朝種田流 昼疋田流

三日 五日 七日 九日 十三日 十五日 朝

三日 五日 七日 十一日 十三日 十五日 昼

朝疋田流 昼種田流

十七日 十九日 廿三日 廿五日 廿七日 廿九日 朝

十七日 十九日 廿一日 廿三日 廿五日 廿七日 廿九日 昼
劔術朝試合之分

二日 四日 六日 十日 十二日 十四日 十六日 廿日 廿二日 廿四日
廿六日 晦日

同 昼試合無之分

二日 四日 六日 八日 十日 十二日 十四日 十六日 廿日 廿二日

廿四日 廿六日 廿八日 晦日

柔術

昼朔日 朝八日 十一日 十八日 廿一日 廿八日

以上

一八日

左之通り被 仰出候

左之通り炮術稽古定日ニ相成り候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候
以上

二月八日

組頭老人 銃頭御頭老人

三日卯刻出 組士九人 午刻出 足輕十五人

銃頭一人 大砲小頭老人

炮手五人 足輕三人

組頭老人 銃頭小頭老人

四日卯刻出 組士九人 午刻出 足輕五人

銃頭老人 大砲小頭老人

炮手四人 足輕三人

此余中甸下旬共右ニ準ス

別紙

一 御蔵屋敷御陣屋稽古出候儀被 仰出候処 右途中通行之刻限半時限ニ相成り候間 左様被相心得道寄等無之様 銃頭并ニ組中江も可被申聞置候 以上

二月八日

別紙

一 攘夷御内定之上者 當表御持場近辺ハ夷船渡来致し候得共 時宜ニ寄り御差図無之内ニ而も御人数差出しニ相成り 若夷人不作法之儀も有之節者 成丈ケ手真似を以て申添 万一不致承引節者臨時之取計致し候様 尤御役人中ハ御差図有之筈ニ付 其節者神速之取計致し候様被 仰出候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

二月八日

猶以上荷船五艘船頭共 公邊方申渡しニ相成候筈ニ付 左様被相心得 此旨も可被

申渡候 以上

別紙

一 此度左之通り相定り候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

二月八日

臨時之節 是迄者御蔵屋敷詰一番出張ニ候所 已後者御陣屋詰之面と一番ニ天保山江出張御蔵屋敷之面と者一旦御陣屋迄罷越し 夫々自分受場所江出張之事

一 十一日

左之通被 仰出候

御陣屋詰之面と自分出是迄一ヶ月三度ニ有之候処 此已後御蔵屋敷詰同様一ヶ月六度宛御門出被成御免旨被 仰付候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

二月十日

一 十三日

左之通り申通し

御警衛詰之面と御門出之節 同夥之次第有之候所 此已後稽古出之分者御蔵屋敷詰御陣屋詰共 右不及同夥勝手ニ罷出候様被 仰付候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

二月十三日

一 十七日

左之通申通し

御場所廻り左之通り相改り候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

二月十七日

御蔵屋敷御場所廻り

一日

安粮寺丹後一手

二日

大西儀左衛門一手

三日

安粮寺丹後一手

四日

大西儀左衛門一手

五日

猶村孫兵衛手

余者右ニ準ス

右者朝六ツ半時揃 御殿前より御使番ハ合図役を召れ 長聲員を立候時者 御場所廻り之當番着到帳ニ付 即時ニ相揃順と罷出候事

但し長聲之九聲に相外れ候ハ、期ニ後るゝとして人数之列ニ不加事
御陣屋御場所廻りも右ニ準ス 尤九ツ半時揃事

御陣屋御場所廻り

一日

香河伊賀一手

- 二日 三浦舍人一手
- 三日 荒尾隼人一手
- 四日 香河伊賀一手
- 五日 三浦舍人一手
- 六日 荒尾隼人一手
- 七日 山本玄蕃手

余(カ)者右ニ準ス

別紙

一 明十八日小笠原図書頭様 公義御船御乗試 安治川沖辺江御越し之趣ニ付 御持場廻り相見合可被申候 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

二月十七日

尚以雨天之節者日送り之趣ニ付 是又可被申渡候 已上

一十九日

左之通申来ル

御番左之通り相改り候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

二月十九日

別紙 定番之次第

壺番 同夥前之通り故略ス

式番 右同断

右者無懈怠御場所廻り當分可致者也

今晚六ツ半時俄ニ香河伊賀從京都被為 召明廿日朝五ツ半時迄ニ京都江罷出候様被

仰付候趣後醍院方申参り 直様香河御小屋江罷出て 出立五ツ半過ニ而通用御門迄見立

ニ罷出ル并ニ御用之子細者不相分 右被為 召ニ付而 留主中ニ浦舍人江相頼、置候様

被申聞 即夜見立之帰り組頭兩人ニ浦江御請ニ罷出ル

一廿二日

今朝曉六ツ半時香河京都方罷帰ル 右被為 召者勅書御渡しニ相成り申候ニ付而之事之

由

一廿四日

今朝五ツ半時組頭 後醍院半之丞 銃頭ニ而野間造酒之助 香河江麻上下ニ而被為 召勅

書御渡し 右者一統ニ可罷出候所 御小屋手狭ニ付右之通りニ相成ル 其後後醍院勅書両

通持参ニ而拝見仕候 右御請として平服ニ而香河江御請ニ罷出ル 勅書写し左之通り

攘夷拒絶之期限於一定者開國之人民勦心可勵忠誠者勿論之儀候 先年来有志之輩以

誠忠報國之純忠致周旋候儀 叡感不斜候 依之猶又被洞開言路雖草莽微賤之言達叡

聞忠告至當之論不論没壅塞様与之深重之 思召ニ候間 各不韜忠言學習院江参上御

用掛之人々江可揚言被 仰出候間 乱雜之儀無之様 相心得可申出候事

連日從巳刻限申刻於九之日廿六日者自午刻限申刻一又一通之方

近來醜夷逞猖獗數覬覦 皇國夷不容易形勢ニ付 萬一於有汚國體欽 神器之事者被為對 列祖之神靈是全 當今寡德之故与深被痛 震哀候ニ付 蛮夷拒絶之 叡思ヲ奉ニ固有之忠勇ヲ奮起ニ速建掃攘之功上安 震襟下救萬民令點虜永絶覬覦之念不汚 神州不損國體様之 叡慮ニ被為仕候事

一廿五日

左之通り申来ル

織田監物儀御旗頭出張迄 諸事御用向取扱被 仰付致到着候ニ付 右御用向引渡候ニ付 左様被相心得 銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

二月廿五日

一廿八日

左之通り申来ル

拙者儀明廿九日御藏屋江引越候ニ付 左様被相心得 其方共江も引越被 仰付候ニ付 組中江も可被申渡并ニ銃頭江者小頭 足輕共召連罷越候様可被申渡候 以上

二月廿八日

今晚暮六ツ時左之通り申来ル

明廿九日交代之儀申渡し置候所 京地御模様柄も有之ニ付見合申来候間 左様被相心得此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

二月廿八日

別紙

一頃日横濱港英利軍艦渡来 不容易形勢 不日開兵端候之旨 撰海邊江渡来難計趣 非常急務之御時節ニ付賜御暇候間 早と持場江罷越し防禦尽力可有之御沙汰之事

右者廿七日夜半學習院江御留主居被為 召被 仰渡

一晦日

左之通り申通し

明朝日被成 御下坂候ニ付 左之面と今日御陣屋江引越し候様被 仰付候間 御小屋割等之儀も可有之候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申聞候 以上

二月晦日

大西儀左衛門一手不殘

猶村孫兵衛一手不殘

外 香河伊賀大砲

小頭足輕共

別紙

一中将様明朝日當表江被成 御着駕候間 非番之面と為御迎例之處江罷出候様被 仰付候間 左様被相心得 此旨銃頭并組中江も可被申渡候 以上

二月晦日

今晚七ツ時香河方後醍院呼ニ参り候而早と後醍院罷出候処 兵庫沖合江異國船相見之趣

ニ付今日廻り番之面と是方明日迄相詰候心得ニ而 手廻し次第天保山江相詰候様申参り
明日迄之兵粮用意致し出張致ス 尤未夕陣之所不分り也ニ付 具足箱等者残し置 小袴而
已ニ而 家来志人召連レ 跡之所者非番之同宿江頼置并ニ夜具者御上江御廻しニ相
成り候ニ付 船場江差出し候様申参り候ニ付 家来之分共御門外大川迄差出ス
當夕御使役備役山下清太夫罷出ル并ニ夜中一伍ツ、交り合海邊相廻ル 諸家様共江夫と
之御請場江打燈見ゆる下宿者兼而被仰付有之候 吉や茂兵衛方江休足ス
御目付下奉行共罷出ル

○三月朔日

今朝左之通り御陣屋方吉屋江申来ル

中村彌市殿

香河伊賀

當御模様柄ニ付 昨晚方當番之面と天保山江相詰候様被 仰付候処 異船退帆之趣
相聞候ニ付 引取候様可被申渡候 以上

三月朔日

組頭 後醍院半之丞

落合勝次郎

宮城久之丞

阪田猪太

浅井又蔵

田中岩之丞

桂 修助

木村才助

山崎篤允

銃頭 野間造酒之助

足輕十五人

以上

右ニ付香河江引取之段相達ス 今日者右相詰候面と非番ニ付御迎ニ可罷出候處 右相詰候
ニ付 組頭中村弥市方右御迎御用不参之義申通ス 依而不罷出

天保山方御陣屋江引取時刻昼九ツ時

今日 御着駕 暮六ツ時前之由

一一日

左之通り申通し

明日上巳之処 御旅中ニ付御流ニ被 仰出候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可
被申渡候 以上

三月二日

一三日

今朝左之通申通し両通有之

○去ル廿七日御諸司代牧野備前守殿方御留守居御呼出し二付 左之趣御達し有之候之間
左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

二月廿日

此度横濱港江英吉利軍艦渡来 昨年嶋津三郎儀 江戸出立掛ヶ生麦おゐて 三郎家来
英利人を殺害ニおよひ候義ニ付 三ヶ条之儀申立 何れも難承届之筋ニ付 其趣を以
て可及應接候間 速ニ兵端を開候哉も難計候而者 銘と藩辱之任ニ有之候ニ付 夫と
備向手當方も可看候間為心得之相達し候事

○今日傳 奏野宮宰相左中將様方御留守居御呼出しニ而別紙之趣被為蒙 仰候ニ付
左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

二月廿九日

此頃英夷撰海江渡来も難計ニ付 大坂海軍當分総督之心得を以て軍政ニ預り 諸事致
差図候様 猶又手配行届候上者 国許防禦隱岐應接等之儀も申心得 且一先致帰国候
様被 仰出候事

二月

今日昼後方御陣屋江被為 入 夫方天保山江被為 入候ニ付 御迎として御陣屋表御門
外江罷出候様組頭方申聞罷出候所 御出懸ケ新堀通り御乗切りニ而 御下りわくがはなニ
而御乗船ニ而天保山江被為入 御帰りも御乗船ニ而御上りニ相成り候而 御陣屋江者不被為
入御乗船其俣ニ而安治川橋迄被為入 夫方御乗切との御様子ニ而引取 尤昼後早と御迎ニ
罷出候処 御陣屋江不被為入候ニ付 船場ニ而御時宜之上一旦引取 同八ツ時迄罷出居候
所又不被為入候ニ付引取候事七ツ半過也

一五日

左之通り申通し

此度京都方被為蒙 仰候趣ニ付 明後七日 御發駕被遊 御上京旨被 仰出候間
左様被相心得為御見立 例之通り例之所江可被出候 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡
候 以上

三月五日

明後七日曉七ツ時之御發駕之趣ニ相聞候ニ付 猶又聞合セ候様別ニ申来候事

一六日

公方様去ル四日御上洛被為 在候与の噂也

此度 御家様御上京被為 在候ハ 此度攘夷御一定ニ付而者 諸国万民無難防禦致し御祈
禱之ためニ加茂之社江雲上 御幸行ニ付 其御供と申風説之事

一七日

今朝曉七ツ前為御見立与御蔵屋敷江罷出ル 當御陣屋御門御鍵之儀者 夜前香河方御目付
江言廻しニ相成ル

御發駕朝六ツ半時 帰り五ツ半時也 尤御蔵屋敷御殿方表御門河岸御乗場迄御駕籠 夫方

御乗船ニ而伏見江被為入 明八日京地御着之趣也

今日天保山御家江御引渡しニ相成り申候由承ル并ニ左之通申通し

黒田日向儀在坂大奉行被 仰付候間 左様被相心得 銃頭并ニ組中江も可有通達候
以上

三月七日

一十一日

今日加茂江 御幸之由承ル

左之通申通し有之

詰中武宮丹治 遠藤儀兵衛江致入門 炮術手續等致修行候之様被 仰付候間 此旨
銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

三月八日

別紙

此度別紙之通り被 仰出候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以
上

三月十一日

猶以只今迄御場所廻り之儀者 暫時相止メ候様被 仰付候間 是又可有通達候 以
上

別紙

天保山昼夜番

十二日
同夜

織田手 當番
香河手 同

十三日
同夜

大西手
三浦手

十四日
同夜

荒尾手
遊隊鉄砲頭

十五日
同夜

織田手
香河手

十六日
同夜

大西手
三浦手

十七日
同夜

荒尾手
遊隊鉄砲頭

十八日
同夜

香河手
織田手

十九日
同夜

三浦手
大西手

廿日
同夜

遊隊鉄炮頭
荒尾手

廿一日
同夜

香河手
織田手

廿二日
同夜

三浦手
大西手

廿三日
同夜

遊隊鉄炮頭
荒尾手

右者御持場昼夜詰之割 朝六ツ時出 夕八ツ半時出ニ而半隊之内六更ニ割巡行之事
其外猥ニ御小屋外江罷出之儀無用之事

一十二日

今晚八ツ半時天保山江御番江罷出ル 今朝方織田手一番組相詰是与交代致ス 翌朝六ツ半時
大西二番組と交代并ニ御使番方左之通り申聞有之候事

一天保山近辺者勿論安治川口等江異人乗込申儀無之様ニとの被 仰付之事

一船三艘船頭共引付有之ニ付 万一之節乗出し可申事 其外上荷船十五艘申付有之候ニ
付 右者異船渡来之節か 或ハ何か御用之節者芳屋茂兵衛江申付候ハ、早と差出し都

合之事并ニ万と一異船渡来之節者公邊方上荷船五十艘御渡しニ相成り候由

二百艘共言

一御持場付御馬老疋 是者異船相見へ申候節 御陣屋江注進之ため也 右者御組筆頭乗
備候事御番帳拵へ置候事

一十六日

中将様御下坂之趣ニ付 明十七日御迎として可罷出様 今夕内沙汰有之

一十七日

中将様今日弥御下坂之御様子ニ付 例之所江御迎与して罷出候様口達候而頭方申来ル 夫
方昼飯相仕舞罷出ル 伏見方御乗船ニ而御下り 昼八ツ過御下坂并ニ左之通り申来ル

中将様明十八日 御發駕被 遊候付 非番之面と例之通り例之所江御見立与して可
被罷出候 此旨銃頭并ニ組中江も通達可有候 以上

三月十七日

一十八日

今朝六ツ時御持場御番江罷出ル并ニ 中将様今日御屋敷御乗場方御乗船ニ而天保山江被
為 入 御備之御筒悉空炮手續き御覽 夫方同所湊石橋之向入御菓屋江御小立ニ相成り
番頭 御使番御組共被為 召 右御小立御内縁江被為 入 右同内縁前迄被為 召 御元
被 仰渡難有仕合 右御請組頭方一統共申上ル 夫方天保山東舟入ニ而御乗船ニ付 右同
所迄御見立申上ル 夫方波除杭外迄被為 入 川船方海船江御乗替りニ相成 其節御船之
上ニ而御扇子ニ而御招ニ相成り 御使番伊丹 岩越 福原罷出候処 御手内ニ而御菓子箱

一ツ惣躰江頂戴被 仰付候趣ニ而 早と持帰り申渡一統陸ニ而拝ス 夫を其俣西ノ宮迄御乗船ニ而被為 入候事

今朝ニ番組御蔵屋敷江御見立ニ罷出候處 同所ニ而御見立不申上 天保山江罷出候様被仰出一統罷出ル 尤非番之内ニ浦 荒尾手之内半隊宛都合一隊御陣屋江相残り候事左之通り被 仰出

此度製造役場にて大坂詰之面と但炮手迄之番善物御世話申遣出来ニ付被成御渡候之間 裏判手を請取可申 尤代銀之儀者勘定所承合可致上納 尤御役替等被 仰付候節者製造役場江致返納候者 其節代銀同所を差返し可申候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

三月十七日

一廿一日

今日式番組昼御番之所 左之通御蔵屋敷を楠本行之助馬ニ而御持場江罷出ル

兵庫御急状

今廿日八ツ時蒸気船ニ艘佛蘭西軍船ニ而横濱去ル八日出船致し 長崎江通船之筈ニ而加田 浦戸を明石江乗り通之由之処 右之内一艘少と損し所有之 西風高波ニ而通船難相成趣を以て兵庫迄乗戻し碇泊仕候由 横濱を水先ニ乗組候日本人之申出ニ有之由 尤兩艘共長サ五十間計乗組人数二百人宛之趣ニ御座候

右軍艦ニ有之候得共 何も相変候儀無之 例のみかん 玉子等調度由ニ御坐候

三月廿日 亥ノ下刻達シ

右之趣ニ而福原惣之助一人當夕芳屋江宿し候由 但し御番之面と者余余無之ニ付交代致ス

一廿三日

左之通り申し来ル

遠藤半兵太夫儀鎗術世話致被 仰付候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

三月廿三日

一廿四日

左之通り申通し

乾雅楽之助儀此度御警衛詰被 仰付到着致し候ニ付 此段拙者を御沙汰申置候間 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

三月廿四日

當表御警衛詰之面と末と迄病氣之節 銘と望之醫師御治療相頼候儀者勿論之事ニ候然ル処を御手當此度御国表を醫師御呼寄ニ相成り 格別之御趣向を以薬店を醫師方江薬種類無差支為相納 追と病者之治療差支無之様御世話被成下候 是迄迎も薬種等 等閑ニ相心得候而無之者勿論ニ候得共 多人數之内ニ者無余儀不都合手支等致出来候而 不任心庭自然等閑ニ相成り候向 追と出来申間敷共難申 萬と一左様之向有之而者 忽医師及迷惑候ニ付 其節之次第柄ニ寄及指図儀も可有之ニ付 兼而何れも

様相心得藁札等 等閑ニ不致様無急度及沙汰置候事
別紙左之通り 御沙汰有之候段京都表方申来候事

英夷渡来関東之事情切迫ニ付 防禦之為大樹帰府之儀 尤之訳柄ニ候得共 京師并ニ
近海守備警衛之策略大樹自指揮可有之候 且攘夷決戦之折柄君臣一和二無之而者不
相叶之所 大樹関東江帰府東西相離候而者 君臣之際情意不相通 自然関隔之姿ニ相
成り 天下之形勢不可救之場ニ至可申候 當節大樹帰府之儀者於 叡慮不被安候間
滞京有之守衛計略厚被相運奉安 宸襟候様 恩召候 英夷ニ應接之儀者浪花湊江相
廻り拒絶談判可有之 開兵端候節者大樹自出張□事被指揮候ハ、 皇国之元氣挽
回之機會ニ可有之 思召候 関東防禦之儀者可然人才相撰被申付候様 御沙汰之事
一廿八日
左之通り申通シ

當表御警衛詰之面ニ自分并従者之着具其外銃炮惣而的道具之品ニ修覆中ニ而御国
江残し置 或ハ獨歩ニ而罷越し不得止 御国江残置候面ニ者其段願出候者此度限り
御上作廻ニ而御廻し被遣候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候以
上

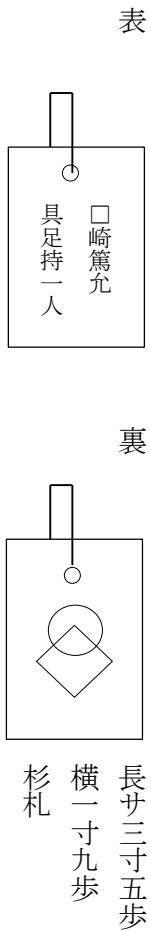
三月廿八日

○四月朔日

今日御組江御渡し之御筒相渡りケヘル筒一挺受取

一五日

左之火兵札相渡ル



右者出張之節具足箱江相添御小屋前江出し置候ハ、右之札見合御上方人参り御場所江
持参り候事

一八日

左之通り乾方香河江申参り御切紙ニ而組頭後醍院江申参 後醍院頭江罷出候所 左之通り
被 仰付候事

京都表方壮健之者十人御用ニ付 大急差向候様 同所方申越し候ニ付 但し内兩人明
九日晚方迄ニ京着致し候様被 仰付候間 名前相撰直ニ當人江可被申渡候間 只今
之内右名前可被申渡候 以上

四月八日

右ニ付則左之通り被 仰付

左之兩人儀京都表江大急御用ニ付 明九日晚方迄ニ致京着候様被 仰付候間此段可
被申渡候 以上

四月八日

落合勝次郎

桂 修助

右ニ付兩人罷出ル十五日下坂致し候事

一十三日

左之通り被 仰出

只今迄御條目之節御陣屋詰之面と者不罷出候得共 此以後罷出致拜聞候之様被 仰付候

依之左之通被成御改候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

四月十三日

御條目

毎月 朔日

十五日

但し正月者朔日流れ之事

一地之御役人者只今迄之通り朔日計罷出可申事

一御警衛詰之面と者御蔵屋敷詰 御陣屋詰 妙徳寺詰之分共 一手を半隊宛二分 兩日

ニ罷出可申事

猶以御時刻之儀者只今迄之通り五ツ時揃ニ候間 是又左様被相心得 此旨も可有通達

候 已上

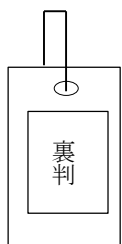
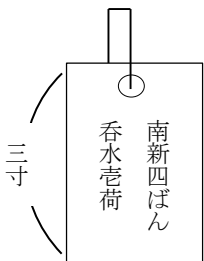
一十五日

左之通り申通し

御陣屋詰之面と此節香水差支難渋之趣ニ付 當分日と香水御廻し被遣候間 委細之 儀者同所裏判手承り合可被申候 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

四月十四日

右ニ付今日方水被遣之依而左之木札日とニ裏判方配り 夫方其札を持水と引替ニ致ス



表出41

一廿一日

明日 公方様當表江御入 城ニ付 今日明日兩日御門止メ相觸并ニ左之通申し通し

此廿日御城代方御留守居御呼出しニ而左之通り御達有之候間 左様被相心得 此旨銃 頭并ニ組中江も為心得之可被申渡候 以上

四月廿一日

撰海者極要之地ニ付 形勢為 御覽置 公方様明廿一日此地江被為 成候旨被 仰出候

尤右清水社江御參詣 夫方此地江被為 成候事ニ付条京地老衆方申參り候間 此段御達し申候

一廿二日
左之通り申し通し

瑞軒山御陣屋御手持ニ付 此度福島明德寺御備詰ニ相成り 大西儀左衛門一手相詰居申候処 同寺御門出門等始諸事 御蔵屋敷之通り相心得候様被 仰付候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

四月廿二日

公方様此度 御在坂中御持場所猶又被成御嚴重ニ候様 昨日町御奉行方御留守居御呼出し沙汰之趣も有之候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

四月廿二日

今日御目附衆方御留守居御呼出しニ而 公方様海岸為御見分明朝六時之御供揃ニ而被遊 御出船候旨 且右ニ付左之趣御達し有之候間 左様被相心得 天保山江可被出候 以上

四月廿二日

猶以右御達し之趣 銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

海岸

御覽置御順書

一安治川沖手方神崎川川筋 御覽置 撰州地方通 兵庫 御上陸 同所和田ヶ崎方御船江被為召 海岸通 淡州松尾崎 御上陸 夫方沖手 御通船 同国由良浦 御上陸 沖ヶ嶋沖通り御廻り紀州加田浦 御上陸 岸和田 堺海岸沖手方 御覽置 安治川口ニ而川 御座船江御召替被遊候積

一御通船相成り候御道筋之内 領分又者御固場所等有之面々御警衛方之儀者虚師者勿論無益之手数等相掛不申様相心得 持場江者其所詰合罷在候人数等を以 実備專一ニ行届候之様重役之者指揮可致 尤 御通船之節者海岸持場内江平伏罷在不苦候事

一廿三日

公方様今日六ツ時之御供揃ニ而安治川通り御下り 沖碇泊之蒸気船ニ御乗替り 夫方兵庫江被為 入 晩七ツ時今朝之處江御帰リニ相成り 御川船ニ御乗替リニ相成り 安治川口迄被為 入 天保山東松原土手ニ而 御上陸ニ而御帰 城ニ相成り 昨日右之通り被 仰出置候得共 御模様代り兵庫計ニ相成り申候由 右ニ付當番非番なく天保山江惣出張ニ而半日五ツ時引取

一廿四日

左之通り申通し

此度御城代方御留守居御呼出しニ而左之趣御達し有之候間 左様被相心得 此旨銃頭

并ニ組中江も可被申渡候 以上

四月廿四日

攘夷之儀五月十日可及拒絶段御達しニ相成り候間 海岸防禦筋彌以嚴重ニ相備襲来
之節者掃攘致し候様可被致候

右之通り万石以上以下之面と江も不洩様可被相觸候

四月

一廿五日

今日九ツ時香河方組頭呼ニ参り候所 先日 勅使姉小路少将様當表へ被下候所 今日天保
山江御出ニ付 香河ニ浦之二隊御持場御固メ与して罷出候様申来り 早速出張致し候所
九ツ半時安治川筋方船ニ下られ 天保山ニ而上陸ニ而被為入 空炮御所望ニ而二挺ニ而三発
ツ、炮発ス
後又御乗船ニ而沖蒸気船ニ御乗替 兵庫方淡州 紀州江被為入候与の事也 依て八ツ半過惣
引取ニ相成ル

一廿六日

左之通り申通し

去ル廿三日傳 奏野宮宰相中将様方別紙両通之通り御達し有之候間 左様被相心得
此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

四月廿六日

攘夷期限之事来ル五月十日無相違拒絶決定仕候間及 奏聞候 猶列藩江も布告可致
候事

四月二十日

家茂

別紙

拒絶之事来ル廿三日期限之処延引之次第委細言上之事 大樹上洛前滞京十日与被
仰出上京参 内仕候前度、御使等被下 就中賀茂行幸供奉之節者蒙別段之寵遇感
戴之至情速東下致し候ニ不恙勿論其比英船渡来不穩形勢候得共 攘夷之儀 大樹留
守中ニ而も可行届存候間 旁今暫滞京致し 攘夷之儀者水戸中納言差遣度奉仰願處
関東人心只管大樹之在帰を渴望致し居 士氣難成掃攘行届兼候段 老中ヨリ遂ニ申越
し 尾張大納言方茂同様之儀急飛を以て申越し候次第ニ而関東之形勢大樹東下不仕
候而者 内地之人心澳散致し攘夷難仕勢ひニ相成居候故 不趣己期限延引ニ相成候事
一ツ橋帰府拒絶應接振如何哉之事
當時帰府之上拒絶應接振之儀者其期臨之言葉之順席も有之候得共 大意者一時和親
交易所詰候處 元来奏 聞を不経開港候事故 □(ぐにがまえに蓋) 国人心不居合
之廉を以 断然拒絶之及應接候事

一廿七日

左之通り申通し

姉小路様明廿七日兵庫方御帰りの筈ニ付 拙者一手為御固四ツ時天保山江罷出候様

簾頭方申来り候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

四月廿六日

猶以當番之面々者例之刻限方罷出候様是又可被申渡候 以上
右之通り被仰出候得共 昨夜御帰リ之旨ニ而當番之外不出

一廿八日

去ル廿二日方當表江 公方様御入 城ニ相成り候ニ付 當分御門止メ被 仰出置候所今
日四ツ時此右御門止メ御宥免ニ相成り候旨相觸候事并ニ左之通り申通シ

公方様近海為 御覽置 今廿八日七ツ半時之御供揃ニ而泉州堺御奉行御役宅ニ而 御
昼休 夫方蒸氣船江 御乗移り 泉州沖手方淡州由良浦御上陸 友ヶ島沖手 御通船
紀州加田浦 御上陸 同州大川又者泉州岸和田辺ニ而 御碇泊 翌日淡州松尾崎 御
上陸 夫方摂州地方御通船 安治川口目印山御上り場方被為 上堤通り 安治川町筋
還御之旨 昨日御目附衆方御留守居御呼出し被申達候間 諸事此間之通り相心得
一手組中配下共召連明朝五ツ時迄ニ天保山江致出張候様申来り候間 左様被相心
得 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

四月廿八日

右之趣ニ付明朝七ツ半時方天保山江罷出候様組頭江申通之事

一廿九日

今朝六ツ時天保山江罷出ル 尤御蔵屋敷 福島詰 御陣屋詰共不残出張 同晚七時安治川口
沖ニ而川御船江御乗替り 天保山東御上り場ニ而 御上陸 御持場東御路次口方御臺場北
側玉除ケ土手江 御床几被為 懸御据付 大筒不残空砲三発ツ、手續き 御上覽 已後乾
織田 香河 大西 三浦 荒尾 伊丹 岩越 福原 赤座被為 召候并ニ今日御固メ北御路次口
方御臺場迄之御道筋江配備 夫方南御路次口方還 御ニ相成り 暮六ツ時御陣屋江引取并
ニ左之御方様御供ニ而被為 入候事

水戸 備前様

餘四鷹様

右之通り被為 入惣下坐
左之通り申通シ

此已後於當御地左之藝術稽古左之日限見分有之候間 左之趣ニ被相心得 此旨銃頭
并ニ組中江も可被申渡候 以上

四月廿九日

- 一 當時稽古之俣を致見分候儀ニ付勿論着用向并次第柄等不及相改諸事平常之通り可
致修行 尤猥ケ間敷儀無之様申合可致出精事
- 一 諸事頭取世話役被申談し同人方之随差図可事
- 一 御警衛詰之面々者當番之外成丈ケ繰合不參不致様出席可致事
- 一 御用不參并病氣故障等ニ而無據難罷出節者其度ニ頭取迄嚴重ニ可被申達事
- 一 御警衛詰之御役人并定詰御役人共御用向繰合付候ハ、可致出席事

但し定詰御役人不参之儀者別段不及御断事

見分定日

二日

昼弓術

柔術

日限之儀者右二日之定

馬術

十三日

朝種田流鎗術

十五日

昼疋田流鎗術

廿日

朝試合之分釵術

廿四日

昼試合無之分釵術

右者於蔵屋敷

晦日

炮術

右者於御陣屋

以上

○五月朔日

今日之非番三番組御蔵屋敷江御條目 罷出ル 御時刻者例之通り

左之通り三通被 仰出候

公方様昨廿九日天保山江被為 入 御臺場早ク見事ニ出来 何れも致心配候儀可有之

与御大慶 思召 猶乍此上心付候様 此旨一統江も可申聞旨 御意之趣 板倉周防守

殿を以被 仰渡候間 左様被相心得 銃頭并組中江も可被申渡事

五月朔日

右者昨廿九日頭役迄面々御臺場玉除土手江被為 召候色々 御意之趣之旨 尤 御直命

之所板倉様御取成し被成候旨

別紙

一 左之趣無急度及噂候間 左様被相心得 觸口支配等有之面々者右觸口支配末々迄并

自分家来江も可被申渡候事申通し

但し今日不参之面々江者向々方不洩様通達之事

御警衛詰之面々他行之節心得方之儀者兼而被 仰出も有之 何れも右弁居申事二者

候得共 此砌公方様御在坂中之儀ニ付 別而相慎無作法異論ケ間敷儀等無之様相心得

可申事

一 追々暑氣之折柄ニ相成り候ニ付而者御警衛詰之面々市中徘徊之節思立相用候ハ勿論

之儀ニ付 何れも其心得二者可有之候得共 若任弁利日傘相用候向共有之候而者御警

衛詰二者別而不似合ニ付 右等之風躰不致様相心得 末々迄一統ニ日笠相用可申事

一 外御長屋住居之面々者内御長屋与違ひ高ケタ高突等迄も相嗜 勿論連子越しニ持或

者致對話等連子ニ干物等致し候儀不相成 右等之義者何れも相心得居申事二者可有之

候得共 猶又急度相慎可申事

五月朔日

別紙

一左之趣無急度及噂候之間 左様被相心得 觸口支配等有之面と者觸口支配江も可被申渡事申通し

但し今日不参之面と江者向と方不洩様通達之事

御家中之面と 公用者素方自用ニ而も事柄ニ寄支配頭役預仲ケ間 相組 同役等者猶又無腹臆申談合候之様ニ与之儀者 兼而被 仰出居申候儀ニ付 何れも遺失者有之間敷候得共 銘と格式或者役場之意地を張り合 他方仕向方不心ニ落儀有之候共 先方江熟談も不致 直ニ支配頭役頭江自分之考を申立 他之不念を察し候而も 不告知も却而蔭方致誹謗等 尤當時右等之向有之与申候者無之候得共 其等之勤方ニ而者一向和順之氣味合無之 兎角何事も和順無之而者不相成所を 中将様江も深く被遊 御配意 度と 御沙汰之趣も被為在 殊ニ當今之時勢 軍勢之儀者聊之事ニ而不覺を取候而も 御大事ニ懸り候場合ニ付 銘と心付候儀者 他組 他役場之無隔 懇志を主として互ニ心を付合又詰所之御用向者不及申 御為筋等存付候儀有之候へ、無遠慮其向江得与申 談合 右談しニ預り候向も存意を不包無腹臆及示談 兎角不寄何事一統ニ隔意無候様 和親を以談合行届候様相成り度事

右者組頭香河御小屋江呼出し右之通被 仰出候由

一三日

左之通り被 仰出候事

公方様明四日七ツ半時之御供揃ニ而幸町五丁目河岸船場方 御乗船 木津川口松平

○此御方御固場之海岸 御船中ら△

土佐守殿御固場○ △御覽 右沖手ら蒸氣船江 御乗移り 夫方淡播州浦と江 御

上陸 還御之節安治川口嶋田新田松平備前守様砲臺 御覽 川御船ニ被為 召移

土佐筋川筋被遊 御廻船旨被 仰出候間 明四ツ半時大砲懸り之面と天保山江為御

固罷出候様申渡し候間 左様可被相心得候 以上

五月三日

猶以安治川口 還御之趣ニ付 何時ニ而も詰場江出張之心得ニ而 銃頭并ニ組中江も

被申渡置并於御場所之猥ケ間敷儀無之様相慎罷在候様 是又可被申渡置候 以上

一四日

今夜御番出勤然ルニ朔日被 仰出候趣ニ付 織田手不残 三浦手不残御固として罷出候処 晚迄御帰りニ相成り不申ニ付 暮前比惣引取ニ相成り 右ニ付御使番方申聞候ニ者 只今迄 御帰り無之ニ付當夕も相詰可申之處 是も難知ニ付先引取候ニ付 万一御帰り之節者御差 図ニ随ひ御取計可申との事ニ而裏判役人耆人相詰居候所 同夜九ツ半過御座船下り候ニ付 見受候処 御帰之御様子 其内御役人町与力ら面談致し度旨ニ而則當番之者應對致し候所 御通船ニ相成り申候御川筋甚た困り候間 同所安治川鼻之御邊方末廣橋迄之間江数ヶ所 篝焼候様申候付 自分家来等足輕共江申聞薪相運セ焼セ 無子細 還御ニ相成り 八ツ半 比詰所江引取候事

一五日

今朝例之通交代致ス 但し忝番之方者昨夜還御之趣風説者承り居申候所 乾方御固として
天保山江罷出候様申参り候由ニ而 御固として忝番組罷出候得共 昼比引取ニ相成ル
一左之通申通し

左之趣申通し

一馬術見分日二日ニ至り取極候筈之処 以後左之通り治定ニ相成り候事

晴雨之模様ニ寄り

毎月七日 八日両日之内忝度

但し両日共雨天候ハ、流し

一天保山當番并出張之面と間ニ者炮臺江登り 或ハ野狩 外江出候族も有之様相聞候処
此以後右等之儀一切不相成 若し相背此余不作法之躰有之候ハ、其手御役方嚴敷
差咎候筈ニ候間 左様被相心得家来末と迄急度可被申付事

一七日

左之通り申来ル

拙者儀織田監物と交代被 仰付候間 明後九日四ツ半時御蔵屋敷江引取申候并ニ其
方共組之面と儀も引取被 仰付候間 左様被相心得 此旨組中江も可被申渡 同様名
札之所江引取可被申候 以上

五月七日

猶以左之面と左之者共者左之通り候間 左様被相心得置 此旨銃頭江可被申聞候以
上

銃頭

小頭

足輕

御小屋詰り候ニ付當分御陣屋江其俣残り

一九日

一昨日御蔵屋敷ニ引越し被仰付置候処 俄ニ今日之處先廻引ニ相成り候段 今朝組頭方
申通し

一十一日

公方様今日御帰京被遊事申通し

組頭

銃頭

組中

支配有之面と者支配之者共江も

一十三日

今日忝番組夜御番ニ出勤ニ而左之通り御持場當番丈ケ江申し参り候由

小笠原図書頭殿去ル八日江戸表御発船 今日比目印山沖合江御着 直様川船ニ而土佐
堀川筋御通船之分申来候間 左様被相心得 此旨今日天保山當番之一手江相心得可

被申渡候 尤若し今日中御通船ニ無之候者 御通船有之候以上其心得ニ而罷在候様ニ
与 後日之當番江順ニ申送りニ致し置候様 是又可被申渡候 以上

五月十二日

今日増し組宮川源次郎到着 宮城久之丞 佐藤辰之丞 小子与同宿致ス

一十五日

今日御条目ニ番之方非番ニ候得共 朔日ニ罷出候ニ付 一番組与交り合ニ番當番ニ而不参

一廿一日

左之通り申通し

出張為御手當白米搗込有之候所 此節柄追と損米ニ成り而者不相成ニ付 御警衛詰末

と迄御扶持方米當分左之割ニ而白米御渡し被遣候間 左様相心得候事申通し

但し觸口之者共江も

搗代搗減り等見込割引ニして御渡し

今日承り候處 昨廿日彦根當所江被為入東願寺江御旅宿与申事之由

一廿二日

今日昼御番出勤 香河相詰候所 昼比三浦騎馬ニ而参り 香河江御用有之由ニ而同道ニ而罷
出ル

今晚七ツ半時 代り合引取候處 香河一手大西一手左之通り被仰付候ニ付 早と取懸り用
意致し同夜八ツ時御陣屋出立致ス

香河伊賀

其方儀京都表不輕風説有之候ニ付 大急上京致候様被 仰付候間今日中出立 尤京

着之上和田邦之助承り合可被申候 且又一手組中小頭足輕ニ至迄同様上京被 仰付

候間 此旨被申渡し召れ可有上京候

但し大炮懸り者半数上京被 仰付候間 名前取分直ニ被申渡 右申渡候名前可被申

達事

右之通り被 仰付候ニ付 荷物等不殘穀具ニ至ル迄御陣屋前安治川ニ而上荷船御渡しニ而

御蔵屋敷河岸与罷出ル 夫方淀川船江積替御組一統共船ニ而罷出ル 右御船者御上作廻也

同夜五ツ時伏見江着ス 夫方御組共着船相見合揃候上伏見表八ツ時出立翌廿四日朝正六

ツ時京都御屋敷江着ス 夫方下宿北野之由ニ而北野江罷出ル 和田殿下宿江参り御達し致ス

荷物者伏見方矢張御上作廻ニ而伏見より車ニ而北野迄御廻しニ相成ル 尤具足箱等步行持

之分ハ昨夜人足ニ而御上作廻ニ而相廻ル 北野下宿左之通り

一得松院

和田

一神光坊

香河

一竹林防

大西

一松梅院

佐分利

一梅林院

組頭新兵

一長生坊

福原 中山

矢嶋

後醍院

中村

落合

一 玉鳳坊	佐治	田中	崎井
	桂	坪井	鷓沼
	木村		
	箕浦	宮城	石黒
	佐藤	山崎	宮城
一 源松防	香河	銃頭	
一 壽徳防	同	大炮	
一 松栄防	大西	御組	
一 梅深防	同	銃頭	
一 今小路堀井	同	大炮	
一	裏判		

一廿五日
左之通り被仰出

左之趣被 仰出候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

五月廿五日

左之両様之趣被 仰出候間 左様被相心得 佐分利軍兵衛申合 昼夜組十五人 足輕 一人召連可有出勤候 尤勤向之儀者御留守居承り合 可被相勤候 此旨一手之面と江も可被申渡候 以上

五月廿五日

五月廿一日	清和院門	寺町門	堺町門	下立賣門	蛤門	今出川門	乾門	中立賣門	石薬師門
	土州	肥後	長州	仙臺	水戸	備前	薩州	因州	阿州
					後會津		廿九日方雲州		

昨夜於朔平門邊 姉小路少将刃傷之儀有之甚以不容易候間
右九門今晚方固之儀 人数者相應 被 仰付候
勘考可有之

昼之内者名前不相糺 日暮方四ツ時迄者潜り差寄置 往来之者御所御門撰家方官方門跡方堂上方御家来も名前行先相尋 可被差通候 四ツ時方切り 前順通り名前相糺差通し候事

一 武器之事
鎗被立置可然銃炮小頭五六挺持等可然事

一見廻り場所之事

一御築地外撰家方 宮方 堂上方折と見廻り氣を可被付事

猶以非常之儀ニ付 関白様御始 宮方 御門跡方 堂上方等惣而下座禮節ニ不及旨

被 仰出候得共 旧冬禮節御改廻 尊奉之儀者厚相心得罷出候儀ニ付 自分心得を以 関白様 宮方 大臣方江者下座可被致候 以上

香河方書付ニ而相廻ル

長谷様御供毎日兩人ツ、

朝 五ツ時

晚 七ツ半時

五節句者 麻上下

常者 継上下

右組中之由

一廿二日

今日方御番相立老番出勤

一廿九日

今日二番組夜御番にて罷出ル并乾御門薩州御受之所御様子有之ニ付 御免ニ相成り右仮番所引取之上者薩人老人も御門通し不申候様可致之旨 傳奏坊城様方御申通し 右御引拂後雲州侯江御固メ被 仰付候 右御廻文又と同夜相廻ル并ニ今日左之通り被 仰出候

一松平修理太夫殿先日以來乾御門御守衛被 仰付置候所 今日方御守衛被 免候間相

達候 就而者御守衛人数之詰所 仮小屋無程取拂可有之候間 右取拂相濟候ハ、薩州

人九口御門内往反無之様可被制候 右之趣留守居中江申達し置候得共 各様為御心得被申達候 以上

両傳奏 雜掌

追而御廻覽後坊城家江可被成御返候

右御廻紙今出川備前様方相廻り蛤御門會津様江相廻ス

右下座見江小使老人差添相廻ス并ニ同夜左之通り

御廻状

乾御門御守衛松平出羽守様被 仰出候 今夜方人数被差出候間 各様方迄為御心得申

達候事

右前同断蛤御門江相廻ス

昨日左之通り被 仰付候

一萬里小路様御参 内之節御送り迎之儀 傳奏坊城様方御達し有之 万里小路様方も御

頼御座候 右御家老中江御達し申置候間 定而御沙汰御座候儀与奉存候 今日者最早御

帰館相濟候間 前刻御使も参候間 明日方御兩人御右御方江御参殿可被下候 明朝御参

内之御時刻右御殿方御案内之人参候筈ニ御座候 右様御承知御都合宜敷様御取計可被
下候 御着用万端長谷様之御振合ニ而宜候間 御頼□迄如斯御座候

猶以万里小路様御事 勸修守様之御継兼而此御方様御通家へ御座候為念後御着候

○六月朔日

左之通り申通し

出火之節九門内乗馬不苦旨被 仰出候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有
通達候 以上

六月朔 日

別紙

一 中立賣御門御番所仮成ニ出来ニ相成り候付 右御番所并別紙御道具類今日御門渡し
ニ相成り候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

六月朔日

猶以本文之通りニ付 明二日方大弁當不被遣候 尤夜中老度被遣候間 是又左様可
被相心得候 以上

一 塗木弓拾張 弦共

一 黒塗空穂 十穂

一 征矢 百本

一 弓胴乱 拾 腰釵共

一 種ヶ島十匁筒 十五挺

一 同早合胴乱 十五 釵共

一 火縄筒 十五

一 同口薬入 十五

一 同皮覆 十五枚

一 御長柄 十筋 鳥毛鞘共

一 三ツ道具 壺通り

一 寄棒 十本

右之通り御番所付ニ相成候事

亥ノ六月朔日

裏判所

一三日

今日大樹公御参 内

一八日

今日大樹公御下坂

今晚左之通り手形相廻し候様裏判方組頭迄申参り受取相廻ス

覚

一金壺両式歩

右者御渡し金壺ヶ月分無何角御取替ニ而受取申候

追而御立用可被下候仍如件

亥六月九日

石井十右衛門殿

一十日

別紙之通り御達し有之候ニ付 左様被相心得此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

六月十日

非常之節禁裏御所口向勤仕之仕分帯刀仕 丁平 仕丁等致取持 往来江提灯今度印改
革 別紙雛形通り治定候ニ付而者諸藩中右同様之印不相用候様 夫々江可被申達事

禁裏御所持分
紅胴輪黒自分
紋寸法八寸

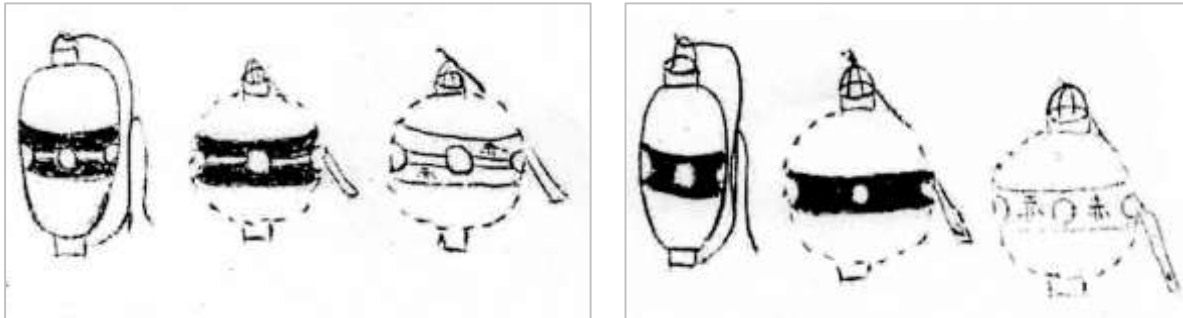
帯刀仕丁黒胴
輪白自分紋

平仕丁黒胴輪
白自分紋

准后御殿侍分
赤二筋胴輪黒
自分紋

帯刀仕丁黒
胴輪白自分紋

平仕丁黒胴輪
白自分紋



一番組式番組之組替ニ而今日昼御番江罷出ル 長谷様江御迎江罷出ル 其節御内家御家来
田中隼人之咄しニ而 昨夕内丸太丁東 久世様江浪人者と相見へ十人余り御門前江集り居
候由 尤袖摺一張を燈し紋ニハ菊崩し之由相咄し候ニ付 其段交代之節咄し置候事 尤其
後子細不承候事

一十五日

昨十四日大坂表江夷人参り候由ニ而 和田殿御使番 福原御使役 中山等下坂致ス

一十八日

今夕河毛文蔵 奥田万次郎早追御使者として江戸表伊勢守様江罷出候 召御用也
左之通り申通

左之趣被 仰出候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

六月十八日

非常之砌 後院御鎮守江為守衛吉田家人数召連候 駆付候節 昼者陣笠 夜者提灯
左之雛形之通り被改候 且出火之節 禁中局会所侍分 左之雛形之通り挑灯致持参
候就而者諸藩中右同様之印不相用候様 夫と可達事

後院御鎮守非常御手当

人数自分提灯上下紅

山道黒紋并ニ黒自分紋

寸法九寸

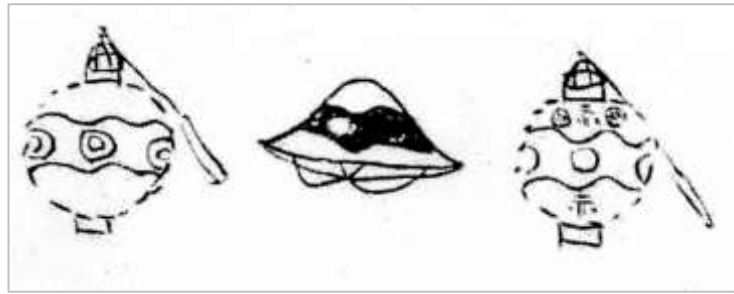
後院御鎮守非常御手当

人数自分陣笠表上下

金山道金自分紋裏金

禁中局會所侍

自分紋



一去ル十四日大坂表江異国船渡来之節 同所御留守居方御達相成り申候写し

口上覚

一今日九分時頃明石鼻方天保山三十丁程沖合江蒸気船一艘乗込碇泊之体ニ相見へ帆
印等も不相分ニ付 実否取糺候處英吉利凶人と相聞へ 直様致手配打拂仕候處 紀州

江向迹去申候 不取敢此段申上候 以上

御名内

赤座為蔵

六月十四日

右之趣を以御當所御留守居方御達し申写し

去ル十四日天保山沖合江異船渡来ニ付打拂候處 紀州之方江迹去候段 別紙之通り御届ケ書差出し申候 然る處御城代方別紙之通り御達し御座候得共 右者背 勅意候儀ニ付御書付返却致し 已後異国船見懸ケ次第打拂可申段相届ケ置候旨 彼地詰合方申越し候ニ付 此段申上候 以上

御名内

安達清一郎

六月十七日

御城代方参り候御書付左之通り

御城代方御達し書写

攘夷之儀未於横濱表談判中ニ付 承伏之有無難決内此方方手向候儀者見合 弥手切ニ相成り候節者猶相達し御品も可有之間 彼方襲来不申内者 僮忽之所行不致様御申付可被成候 尤攘夷之儀被 仰付候ニ付而者片時も警衛向油断者難相成 乍然通船之外 国船無謂打拂之儀者御見合可被成候 右之趣御達し可被置候 以上

六月十四日

一廿一日

左之通り御書附御頂方相廻り候事

御名

去ル十四日天保山沖江英艦渡来之處 奉勅意速打拂候趣神妙之至ニ候 尚又不失其機可有攘斥候事

六月

右転奏野宮中将宰相殿ヨリ御留守居御呼出し御渡し

六月十八日

先達而左之通申通

八日 香河 昼 中村 廻り九日 大西 昼 坪内 夜 後醍院 菅

十日 佐分利 昼 河毛 十一日 大西 昼 菅 夜 坪内 渡辺

廻り十二日 佐分利 昼 渡辺 十三日 香河 昼 後醍院 夜 中村 河毛

十四日 佐分利 昼 河毛 廻り十五日 香河 昼 中村 夜 渡辺 後醍院

十六日	大西	昼	坪内	十七日	香河	昼	後醍院
廻り十八日	大西	夜	菅	十九日	佐分利	夜	河毛
廿日	大西	昼	坪内	廻り廿一日	佐分利	昼	河毛
廿二日	香河	夜	菅	廿三日	佐分利	夜	渡辺
廻り廿四日	香河	昼	中村	廿五日	大西	昼	坪内
		夜	後醍院			夜	菅
非常							
八日	香河			九日	大西		
十一日	大西			十日	香河佐分利		
十四日	大西佐分利			十一日	香河		
十七日	香河			十二日	香河佐分利		
廿日	大西			十三日	大西		
廿三日	大西佐分利			十四日	香河		
廿六日	香河			十五日	大西		
廿九日	大西			十六日	香河佐分利		
				十七日	大西		
				十八日	香河		
				十九日	大西		
				廿日	香河		
				廿一日	大西佐分利		
				廿二日	香河		
				廿三日	大西		
				廿四日	香河		
				廿五日	大西		
				廿六日	香河佐分利		
				廿七日	大西		
				廿八日	香河		
				廿九日	大西		

壹番

落合勝次郎
 宮城久之助
 坪井善太郎
 田中岩之丞
 桂 修助
 木村才助
 平田権内
 箕浦東之進
 佐治幾之丞
 浅井又蔵
 佐藤辰之丞
 鵜沼鉄太
 山崎篤允
 宮川源次郎

貳番

落合勝次郎
 宮城久之助
 坪井善太郎
 田中岩之丞
 桂 修助
 木村才助
 平田権内
 箕浦東之進
 佐治幾之丞
 浅井又蔵
 佐藤辰之丞
 鵜沼鉄太
 山崎篤允
 宮川源次郎

一廿二日

今晚七ツ前頃を俄ニ下坂之噂有之由ニ付承り合罷出候所 弥下坂之趣ニ付用意致ス 則左
 之通り被 仰付候

一大坂表御人少ニ付 急ニ下坂被 仰付并其方共儀一手組之面と同様下坂被 仰付候
間 左様被相心得 夫と可被申渡候 以上

六月廿二日

一廿三日

今朝五ツ時過京北野出立致し 九ツ時過伏見江着ス 夫方仕度相仕舞 八ツ時頃出船 同夜
四ツ時頃大坂江着船 御藏屋敷乾江只今至着之御達し致ス 尤御陣屋近辺ニ而仕度相仕舞
翌廿四日六ツ半過御陣屋江罷出越し 先達而之御小屋江入申候

一廿四日

左之通り申来ル

其方共儀御陣屋詰被 仰付候間 名札之所江引移可被申候 以上

組頭

銃頭

組中

一廿六日

左之通り申通し

乾雅樂之助儀去ル十四日天保山沖江異国船渡来之節 不念之儀有之恐入差控之儀申上
候 左様被相心得 當分拙者儀旗頭之御用向諸事取扱候様被 仰付候間 左様可被相心
得候 依之御藏屋敷詰之面と火急之御門出等者差支候ニ付 都而其等之節者直ニ御目
付江書廻し跡ニ而可申達候様申渡し置候 以上

六月廿六日

左之通り御書参り候由ニ而則写し置候

一 申遣る 去ル十四日英吉利亞船天保山沖合江相見へ候ニ付 其方始出張早と打拂玉
届きニ者無之趣ニ候得共 掃攘致し候段満足之事ニ候 然而其御城代伊豆守方達し有
之以来心得方等申達し候趣ニ而其段承り候得者 先達而從 天朝蒙 仰之品も有之
且一橋中納言殿 松平春嶽殿在京中見懸ケ次第打拂之儀者伺済ニ相成り居儀ニ候得
者 城代方いヶ程達し者有之候而も方一手後れ有之候而者 我對 天朝候而不相済 且
者 幕府江も伺済候事ニ候間 城代之差図ニ拘るべき事ニ無之候間 其方始必死を極
め 重而異船相見へ候ハ、不及手間似無ニ無ニ打拂 若城代方之差図ニ而も 天命
背き難き趣を以て返答ニ及て 主人方方沙汰無之儀者軍中儀御城代之差図ニ而も進
退者不仕趣可及返答 今度川口江端船を以乗込之砌打拂候ハ、実以勇と敷かるべし
にと残念ニ存候 重而來候ハ、是非共死力を盡し候様頼改監物初一同江も厚可申聞
候 委細大隅駿河可申達也

六月十八日

猶以本文之趣伊豆守江も及文通候間 無無念有之間敷候事

左之通り申通し

天保山御番割

香河一手

大砲築田権之丞

能勢金蔵

多羅尾大八

辻中幸松

高濱良蔵

村田代次郎

加島伊之丞

和田為之丞

石原虎之丞

廿七日

岩越作之右衛門

中山猶之丞

足羽立見

織田一手

大砲渡辺勝蔵

伊藤島之助

坂川和右衛門

三村小次郎

遠藤儀兵衛

岩越松之丞

安田小藤太

遠藤猪三郎

鳥飼季次郎

廿八日

竹村平次郎

下清太夫

岡本有器

三浦一手

支配片山長三郎

園城寺鉄四郎

神崎丹治
村岡幾見

廿九日

遠藤半太夫
佐藤金太郎
佐分利外三郎
赤座久蔵
大庭亀之助

福原惣之助
美田源太郎
太田春暉

荒尾一手

支配加須屋右馬久
岩越喜五郎
波多野八之丞

七月朔日

佐分利鉄五郎
荒賀隼人
中山雄太郎
梶川彌之助
伊藤平太夫

柄本竹之助
石上鉄三郎
御番山下清太夫
足羽立見

一廿七日

今朝當番ニ罷出ル 尤先頃迄と違ひ近頃者一昼夜通しニ而一手宛罷出張ニ相成り候事并ニ
右當番之節 天保山ニ於て人壱人ニ付九合ツ、上下なく御渡しニ相成り候 其請取手形
覚

一今日當番ニ付御扶持米左之通受取申候

主従式人

裏判取

○七月朔日

今日御条目ニ付老番組非番ニ而罷出ル

一六日

左之通り被 仰出候

左之趣御所司代方相廻り候由 御城代松平伊豆守殿方御達し有之候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

六月廿四日

攘夷期限之儀先達而布告ニ相成り既於長州遵奉叡慮断然及掃攘候間 此後外方渡来候ハ、無二念打拂可申候 尤警衛之諸藩互ニ相援老力防禦可有之候様被 仰出候事

六月

右者乾雅樂之助殿失念致し候居延引ニ相成候由

一八日

今晚右之通り香河御小屋江組頭呼出しニ而合渡ス

一 一昨三日被成 御参 内候所別紙之趣傳奏衆を以被為 仰蒙候ニ付 別紙差越し申候

右ニ付而者猶又嚴重ニ相心得御恥辱不相成候様取計可被申候 以上

七月五日

荒尾千葉之助

御名

別紙

一 自當月三ヶ月御警衛先達來心得候所 外御用も有之早々上京可有之 去月 御沙汰之所速御詰登 京御満足候 大樹帰府後追々時勢切迫深被惱 震裏候 弥誠忠猶又 国事ニ付被御守下之許ニも可有之 其節無覆蔵存意等委細言上有之候様 御沙汰之事

七月

御名

撰海警衛之儀今度被免候處 去月十四日英艦渡来之節打拂候ニ付而者 暫之所人数其 俛差出し置嚴重ニ手當有之 重而渡来之節者不失其機攘付有之諸藩之規範与可被成 様 御沙汰之事

七月

右者京都方申参り候事

一十三日

今日左之通り被 仰出候事

左之趣昨十二日町御奉行松平大隅守殿江御留守居方申上置候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中大炮懸り江も可有通達候 以上

七月十三日

御警衛持場沖江異船渡来之節打拂之儀奉畏居候所見紛敷御手船并ニ諸家之手船等
碇泊有之打拂致し候節萬一風与飢惣之儀有之間敷共難計詰合一統心配仕候依之
御印能見分ケ付申候様御頭し置被下度兼而此段申上置候以上

七月

御名内

赤坐為蔵

一十九日

今朝御番交代之處勅使四条殿東園殿海岸御巡見として四条殿安治川口御下り東園
殿木津川御下り夫方紀淡之間江被為入候之御事ニ而惣出張ニ相成り候ニ付交代無之香
河手吉屋江溜り頭役會所江溜り則左之通り被仰出候

監察使東園様四条様今日御着坂明十九日陸地泉州堺江御越し夫方御乗船ニ而紀
州加田浦迄御越し御帰り模様ニ寄り天保山江御乗廻り之趣ニ相聞ニ付何連も明日
四ツ半時迄ニ同所江出張被仰付候間左様被相心得此旨銃頭并ニ組中江も今日當
番之面江も可有通達候以上

七月十八日

今日方天保山御番大西下坂ニ付相改ル

天保山御番割

十八日	香河一手	大砲九人	岩越	中山	足羽
十九日	大西一手	大砲八人	福原	美田	岡本
廿日	織田一手	大砲八人	大銃頭式人	柄本	石上 太田
廿一日	三浦一手	大砲八人	河合	山下	勝部
廿二日	荒尾一手	大砲九人	岩越	中山	石村

一廿日

今日も矢張吉屋江出張 晚七ツ半時先引取之後申来り御陣屋江引取候事一昨十八日朝方
今晚迄相詰候事

一廿一日

左之通り被仰出候

監察使天保山江御乗廻り相濟候迄同所御番割別紙之通り候間左様被相心得此旨
銃頭并ニ組中江も可被申渡候以上

七月廿一日

廿二日	荒尾一手	大砲十七人
	香河一手	岩越 中山 美田 医師壹人
廿三日	大西一手	大砲十六人
	織田一手	竹村 柄本 河合山下 石上 医師一人
	大銃頭	
廿四日	三浦一手	大砲十七人

荒尾一手 福原 中山 美田 医師老人

一廿八日

今日方見張番所江昼夜共出ル

一晦日

今日當番ニ付初致し候所 左之通り申来り候ニ付 同晩六ツ時引取御陣屋江入

監察使天保山御乘廻り相濟候迄 當分同所出番相増居候處 未夕御間有之趣ニ付 追而及差凶候 御番割之通り可有出番候 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

七月晦日

又左之通り被 仰出候

一柳包五郎殿方左之通り申来候段御留守居申達候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

七月晦日

一柳包五郎様此度當表安治川口御船手御番所御警衛被 仰付候 右ニ付而者御用之筋以来者御詰合御家老中江此方出張南安治川壱丁目正光寺へ旅宿之詰合家来共方御談可仕儀御座候処 小家之儀ニ付万端不都合も有之候得共 御腹臍無之御教示被下候様被成度段御使有 井上勝内を以御頼候旨到来仕候 此段御達申上候

七月晦日

赤坐為藏

○八月

一二日

左之通り申通し

御目付成瀬弥五郎殿并御徒目付 御小人目付衆當表御警衛并ニ御臺場築立 其外為御用近々被来候筈之旨江戸表方申越し候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

八月二日

左之趣先達而惣方江沙汰ニ相成り候趣候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

八月二日

自用御門出之儀者當節柄之儀ニ付何連も相心得居可申候得共 難去要用之外者相見合可成丈ケ御屋敷御陣屋近邊不相離臨時御間厭ニ不相成様專一ニ相心得 此旨末々迄可被申渡候 此段無急度及沙汰置候事

一三日

昨二日夜八ツ時頃方北久宝寺町方出火 今日九ツ時慎火

一六日

先達而方頂戴候酒今日頂戴被 仰付 頭役一升 組頭 銃頭御組大砲共 鯛式酒五合ツ、足輕式酒三合ツ、御小人右同

一七日

左之両通被 仰出候

當表御警衛詰之面と足輕ニ至る迄 此度大炮修行左之通り被 仰付候間 左様被相心得此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

八月七日

山口謙之進取立

西洋

御先手組士足輕共

大炮足輕共

遠藤儀兵衛是迄之通り門人共取立可申 尤山口謙之進申談し

渡辺勝蔵取立

神發

式御旗本組士足輕共

大炮足輕共

去月十二日傳 奏飛鳥井中納言様方御家老御呼出しニ而左之趣御達し有之候之談申来候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

八月七日

安治川方南是迄之通り松平相模守 安治川方北立花飛騨守 右之通り持場所相心得 夷船渡来之節者共と盡く掃攘可有之事

一八日

今日九ツ半頃香河方御組頭呼寄せられ被申渡候ニ者明石鼻（浦）□夷船相見へ候趣ニ付増し番被 仰付候間 用意致し候様ニとの事ニ而用意ニ取懸り 尤頭御蔵屋敷江乗切ニ而被参候ニ付 帰之上出張可致旨ニ而帰り後直ニ出張 時刻八ツ半頃吉屋江溜ル

右ニ付周旋として荒尾御組ニ而三宅実篤 三浦御組内ニ而上村儀一郎 清水吉之進 明石迄罷越ス 尤天保山ニ而御使役中山猶之丞同道ニ而同所方上荷船ニ而西宮迄船ニ而罷出ル

一九日

今日大西手 織田手當番之所 織田手出張遅刻致し引取九ツ過并ニ左之通り申通し

天保山當番明日方近來之通り一隊宛ニ相成り 明日者三浦手當番廻り候間 左様被相心得 此旨銃頭并ニ組中江も可有通達候 以上

八月九日

一十(カ)日

去ル八日出船之周旋方帰り承り候所 明石沖ニ而炮発之船者式本帆ニ而長州之船之由 右者暮方ニ入船致し候所印等者相見へ不申 淡州ニ而発砲致し候ニ付 明石方も打出し 前右船江式発當り穴も明き候由 其内下高船を以て明石江乗付ケ長州船之段相届ケ候由 右者長州家老上京懸ケ之由也

一十一日

左之通り申通し

四条様明曉七ツ時堺御立 一旦御堂江御帰 夫方天保山江御出 且又東園様明朝貝塚

御立与風同所江御出ニ可相成哉ニ相聞候間 明朝六ツ時迄ニ同處江可有出張候 此旨銃頭并ニ組中江も可被申渡候 以上

八月十一日

一十二日

今日當番出勤八ツ時頃四条様天保山江御出 御臺場御筒實玉御見分御人数惣出張

一十三日

今日四ツ時頃御船ニ而東園様御出 昨日同様實彈御見分御帰り 今日も惣出張引取九ツ半過

去ル七日京都方被 仰出候御固場之内 立花侯方者御請無御座 是非共天保山受取之様被仰付候由 尤公辺方も立花江御催促有之由風聞

一十五日

今日御條目出勤并ニ夜前組頭江香河方明十六日甲冑勢揃有之候由乾方内沙汰有之候間 差支へ者無之哉之談し事

一十六日

今日甲冑勢揃無之 左之通り天保山御定令被仰出有之候

定

一御番頭一手宛日と交代之事

但し臨時出張同様相心得可申 荷物之儀者可相成丈ケ可致減少御上賄ニ而御運送可被遣候事

一騎馬之面と御門前方下馬之事

一遠見番所江者組士炮手之面と同夥三人式十式分合無懈怠出番可有之 尤人数之多寡ニ寄り二夥ニ而も致出番 組頭 銃頭 炮長之面とも右ニ准し可申候 若異船近海江相見へ候得者速ニ頭江届ケ可申 暫も御番致油断間敷事

一御番頭御使有遊隊鉄砲頭御使役諸隊御目付者昼老度夜老度不時ニ相廻り諸番所と改可申 若し懈怠之輩於有之者其段旗頭江達し可申事

一通用御門番所江者昼夜足輕一伍宛相談嚴重ニ相守出入を改一時を限り可致代り番事但し明ケ六ツ時暮七ツ半時御門致開閉 御鍵者諸隊御目付江差出し置可申事

一御門出入之儀者同夥を打離し申間敷罷出候節者頭と江致届ケ罷帰り候節も同様届ケ可申并ニ小頭 足輕も銃頭之手札を以可致出入 都而要之之外可為停止事

一御番頭初メ自分家来御門出入之節主人之手札を以て御門番之足輕江相渡し置 帰り之節請取 夫と主人江返し可申事

但し小人者裏判役所之手形を以可致出入 火兵も相渡し之主人之手札を以て罷出罷帰り候節も同様主人江差返し可申事

一御門出入之儀者都而御役人裏判手たり共其日之主将ニ届ケ致し 妄りニ致出入申間敷事

一毎日不定刻限老度聚軍螺を立 此号を聞時者組頭者組士并ニ從卒 銃頭者銃卒 炮長

者炮手并炮卒等人別を相改メ闕無之段其日之主將江達し可申 酒更も人数之不足を流し不正之改方有之間敷事
右之條々堅相守可申もの也

一十七日

今日當番出勤昨日被 仰出候通りニ相成り 尤上ノ御門御^レ切り 下ノ御門通用御門ニ相成り北側御門者吉屋江御任セ^レ切り 家来者手札を以て御門出入之事并ニ左之通被 仰出候事

一御小屋請取渡し立合之儀御止メ此以後江戸表ニ振合ニ而被 仰付候事

一御陣屋詰之面と自用出之節者同夥同道罷出候事ニ候得共 此已後御藏屋敷詰之通り不及同夥勝手ニ罷出不苦旨^カ被 仰付候事

一昨十六日

御城代松平伊豆守殿方御留守居御呼出しニ而左之御書付御渡しニ相成り候事

尾張大納言殿

大坂表防禦主將之儀兼而 御所方被 仰出候趣も有之方 今之時勢難被捨置場所ニ付 大納言鎮撫被致候筈被 仰上候間 早と御登坂撰海防禦筋其外共十分指揮被在之候様ニ与被 仰出之

右之通り先般尾張殿江被 仰出候旨 老衆方申来候間 此段御達申候

八月

一十八日

左之通り左之面と願書出ス

私儀當表為御警衛相詰居申候所 兼而勝手向難渋仕候者給米等も差支當惑仕居申候ニ付 御時節柄御物入續之御中奉恐入候得共 何卒相應之御銀拝借被 仰付被為下候ハ、難有仕合奉存候 此段奉願候 以上

文久三年亥八月日

山崎篤允判

香河伊賀殿

左之通り無足之面と不残差出し候事

浅井又蔵	石黒弥太郎	田中岩之丞	佐藤辰之丞
桂 修助	鶉沼鉄太	木村才助	平田権内
宮川源次郎	山崎篤允		

今夜八ツ時香河^{口頭}方呼ニ参り罷出候所 左之通り被 仰出并ニ乾當夕急御用ニ而上京ニ相成り申候ニ付 香河江旗頭御用取扱被 仰付候

今度於京地異変之儀有之候得共 不致動揺何れも鎮靜可罷出候筈 心得違之向も有之候ハ、急度被 仰付品も有之候間 左様相心得 此旨末と迄申渡候様被 仰付旨頭と江被 仰渡候事

八月

一十九日

今朝六ツ時左之通り京都千葉之助殿方申来り直様用意致し候様被申渡候

一筆致啓上候 然者其表定詰之外 御警衛御人数不残御引上ケニ相成り候間 夫と致
通達其方始急ニ可致上京候 恐惶謹言

八月十八日

右者用意致し夜九ツ過御陣屋出立致ス 御渡し物三両ツ、但し御小人御渡し之面と之由

一廿日

四ツ半時平方迄参り同所方伏見江晚七ツ半時頃着し即刻出立 同夜五ツ時比京都本国寺
江罷越乾江御達致し同寺内祖師堂江止宿致ス 然ル所 中将様者昨十八日方御参内ニ相成
り 已後未夕御帰館ニ相成不申候 去ル十七日之夜左之面と徒黨致し 高沢 黒部 早川三
人を切殺し逃去候之由 徒黨之人数太田権右衛門 清水七之丞 詫間半六 奥田万次郎
足立八蔵 山口謙之進 河田佐久馬 同人弟新庄恒蔵 塩川孝次 佐膳修蔵 加須屋右馬見
渋谷平蔵 同金蔵 永見和十郎 中井範五郎 太西清太 伊吹市太郎 加藤助之進 中野治
平 吉田直人 吉岡平之進、式十式人中ニ奥田九郎出候後切腹 詫間半六 加藤助之進両
人手負之由 此連中去ル十八日御参 内之節も御窺与して御所江罷出候由 右之連中江者
御書も被遣候由 尤智恩院内御宿坊江居候由 右之御書者心願相達候段之暫く慎静可有
之様との被 仰付候由

御側御用人兼黒部権之助

一右者河田左久馬御用之儀ニ付面会致し度と申座敷へ罷通り挨拶致し候内余黨切入り
而即死之由

御勤役御用人兼早川卓之丞

一右者詫間半六参り面会之段申込候由 其俣抜打ニ致し候由 俣久之助 半六を見懸ケ
切付候所半六も上段方切付候所 鴨居江打込其俣ニ外去候由

表御用人高沢省己

一右者加藤助之進切込候由 高沢も一太刀者切付候得共 其内ニ逃去候 然れ共高沢者
左之カイナを切られブラヅク(カ)位之由 其外胸アバラ骨二本打切レ候由 乍併未夕
息者切レ不申候由

御側役加藤十次郎

一右者其日當番出勤致候 其留守中ニ付「今日當番之由ニ付後日罷出候と」云事認メ
置候所留守方御殿江持出候由 左候得共其俣御用打仕舞翌十八日退審之上切腹

去ル十八日長州様御隠謀ニ而公家衆退身并ニ御所近邊騒ケ敷ニ付 御所内御固メ人数共不
残甲冑ニ而相談候由

一廿一日

昨廿日中長州御人数御引拂堺町御門御免雲州江被 仰付候由并ニ此度之異変之儀者別ニ
記ス 公家衆之退身名前共

一廿三日

今日祖師堂方御本陣江引越ス 六十八疊之間江相組十四人同宿致ス 惣御供之面々共不殘
長者町室町下宿

一廿五日

今日方御所御固メ等平服与被 仰出候由申通し事

一廿六日

左之通り申通し

左之趣被 仰出候ニ付為御固不及出張候間 左様被相心得 此旨組中江も可被申渡候
以上

八月廿六日

九門十八日以前之通開門御番所者平生方二三入増し不審之者番所江止置其行先江
致通達免許之上可通事

一日々御番御出張ニ不及并

天氣御伺ニ不及先仮陣所江奇宿之事

一廿七日

今夕九ツ時頃火事黒谷邊と云

一廿八日

左之通り被 仰出候

此以後出火之節洛中者不及申洛外ニ而も 御本陣前江可有出張候 此旨組中江も可被
申渡候 以上

八月廿八日

別紙

其方一手之面々當分九門内相廻り候様被 仰付候間 御軍式方頭取申談し一手計相
廻り候様可被申渡候 尤大西義左衛門儀も同様被 仰付左之割合ニ候間 左様可相
心得候 以上

八月廿八日

廿八日大西

一廿九日

昨日被 仰付之趣ニ付廻り左之割ニ相成り順ニ昼夜替合相廻候事

朝	炮長高濱	昼	後醍院	夜	中村
		内播		石黒	

夜中 炮長荒木

右之通り杵番組ニ付昼後相廻候 尤九御門入てハ出出てハ入て相廻り候事并ニ左之通り
申通し

左之趣被 仰付候間 左様被相心得 組中江も可被申渡候 以上

八月廿九日

香河伊賀

大西儀左衛門

荒尾千葉之助附屬

一 一手九門内廻り被 仰付置候処 此已後 御所内外共昼夜廻り被 仰付候間 圓山勘
ヶ由共申合御軍式方頭取申談し可被相勤候 以上

八月廿九日

右ニ付廻り番ニ番ニ相成り 矢張以前之通り昼二度夜式度都合四度廻り 着用割羽織 小袴
一晦日

京着方御焚出しニ而主従上下之差別なく竹皮江包梅干一ツ 茄子漬一切レツ、包 三度ツ、
御渡し之所 今日切りニ而明朝日も自分賄ニ致し候様申参り候ニ付 米者油小路万寿寺通
り八百屋清助と申米屋江被遣候事 彼方通ニ致し相廻候事 其外諸道具者裏判所方請取候
事

○九月朔日

今日九ツ時之御供ニ而御参内之由 今日方自分賄

一二日

今日九ツ時御参内

一三日

左之通り申通し

其方共組中足輕等當表江相詰居申候面と名前取調 今明日之内差出し候様可被申渡候
以上

九月三日

今日九ツ時御参内

一七日

左之通り裏判御吟味役方左之通り申来ル

以 手紙得御意候 然者瀬田にも本国寺江被遊 御帰候 御沙汰ニ付何れ下宿替と相
成り候ニ付、ご用意被成候 尤何方と取極り候得者後刻迄ニ御左右可致候間 御然方へ
御通し置可被下候 此段為可得御意如斯御座候 以上

九月七日

後醍院半之丞様

中村彌市様

景山加耶次郎

右ニ付昼七ツ時前同寺内ニ而壇林江下宿替ニ相成ル

今日頭香河伊賀左之通り被 仰付候由 組頭後醍院呼ニ参り 組中江も通達致し候様被相
頼候由之所 用意次第^(虫損)□□者都合ニ付 必何れも参り呉不申候様ニとの事 殊ニ晚景ニ
相成候ニ付 一統不参之事被 仰渡写し左之通り

其方儀去月廿三日御人数御届出し之節不心得之儀有之 殊ニ如何之趣も相聞候ニ付
御国江御差帰し 追而被 仰渡候筋有之候間 道中相慎罷帰り候様被 仰付候

右ニ付大西義左衛門江跡之儀被相頼置候由

一八日

昨日壇林下宿替ニ相成り候所 甚た手狭ニ付其段申談し 同寺内ニ而常澄院江亦下宿替ニ相成ル 尤組頭丈ヶ者壇林内妙見堂ニ兩人共下宿 大西者醒ヶ井通り江町下宿ニ相成ル并ニ大西方左之通り申来ル

左之趣被 仰出候間 左様被相心得 此旨組中江も可有通達候 以上

九月八日

明後十日五ツ時之御供揃ニ而本国寺江被成 御引取旨被 仰出候事

但し右御行列之儀者御目付承合可申事

一 此度本国寺江被成 御引取候処 以前与違ひ追々詰増ニ相成り申候ニ付而者下宿手狭ニ付不当ニ相宿等ニ相成り候得者 成丈ヶ勘弁致し候様

一 先達而以来 御所近辺江相詰居申候御供中 末々迄御支度被遣候所 本国寺江御引取之翌日迄ニ而其後者自分賄ニ被 仰付候

一九日

明十日弥御引取ニ而者御組之方共惣御供之御都合之処 御模様相替り御止メニ相成り候ニ付 明朝大西迄着到ニ参り候様組頭方申聞ル并ニ今日迄者御所内外廻り被 仰付居候得共 今日限りニ而先相見合候様 尤弥之儀者追而被 仰出候之由 口達ニ而右ニ付而者南門御固メも御引拂内丸太町ニ相成り御先手組ニ而持候由

一十日

今朝六ツ時大西江着到ニ罷出ル并ニ本国寺御引取四ツ半時 尤右御迎として惣方共何方江も不罷出

一十一日

左之通り被 仰出

別紙

近来不時御物入節湊何れも及承知候通り御窮迫ニ被為在無御據先達而七ヶ年之間御家中物成三步通り被成御借増 既ニ来年方御返し可被成候之処 去冬被遊御参府候以来 御滞京中并三都之御警衛向 且武器御製造銀等誠ニ莫大之御出高相高 其外不時御入用多之折柄中々以御返之処ニ至兼候得共 御家中之面々何れも当今之時勢 武器用意等可致難儀与深く 御配慮被為在候 依之格別之御繰合を以て未々御年限中ニ者候得共 當秋方物成りニ歩通り御返し被遣 都合ニツ物成り被 仰付候間 先例仕来り杯与申旧習ニ不泥 法外之儉約相努専一ニ相心得 臨時ニ出張等急速之御用 向差支無之様相嗜可申旨被 仰出候

右ニ付御請与して荒尾千葉之助 大西儀左衛門江罷出ル

一十二日

今夕四ツ時組頭方御殿後人丸社江御番所出来ニ付 只今より出番致し候様御殿ニ而御目付方組頭江申聞候由ニ而 即刻ニ番組ニ而出番 尤圓山組とニ組ニ而右御番所相持可申之旨出

番昼夜共時刻六ツ時方六ツ時迄

一十三日

御参内御當番今日方相始り 已後今日方五日目之御出張之事 右ニ付而者御人数も御固メ
罷出ニ方御行列書別紙有之 尤御人数者御参内之有無ニ不拘罷出候事 右ニ付今日者老番
組出張御番組者夜前御番并ニ 御参内無之ニ付罷出ス 則御参内之節者香河組 大西組之
二組 重而之節者圓山 佐分利之ニ組ニ而替りく出張之事
左之通ニ通申通し

御家中之面と従者之背章 胸章御定メ被 仰付候間 早と可有用意 尤委細之儀者御
軍式方頭殿承合可被申候 此旨組頭江も可有通達候 已上

九月十三日

其方共初組中共左之御番所昼夜出番被 仰付候間 御目付承合相勤可被申候 此旨
組中江も可有通達候 以上

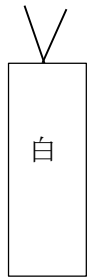
九月十三日

人丸後御番所

此度多人數相詰自他難見分儀も有之候ニ付 夜ニ入候得者直と賦之無差別 左之袖印
来ル十五日方嚴重ニ相用候様 尤兼而法皮御渡し申分江者裏判方御渡し被遣候 其外
之分者自分ニ出来相用候様被 仰付候間 左様被相心得 此旨組中江も可有通達候
以上

九月十三日

一尺二寸



二 木綿ニても晒ニ而も足し
寸 尤片袖ニ付て宜し

一十五日

去ル十三日去月十七日之御裁許被 仰付候由ニ而写し則左之通り

黒部権之介

高澤省己

早川卓之丞

右者去月十七日之夜逢斬殺候段重御役儀を相勤候身分候得者兼と心得方も可有之處
右等不容易場合ニ相成り候上者家断絶被 仰付筈ニ候得共 此度之儀者非常出格之
御含を以家名其俣御立被遣候旨被 仰出候間 家續之儀者間柄方相願候様被 仰付
候事

加藤十次郎

右者高澤省己 黒部権之介 早川卓之丞儀 此度逢斬殺候儀ニ付 御上を憚り致自殺
候段尤之事ニ者候へ共 心得も可有之處 右等不容易次第ニ相成候上ハ家断絶被 仰
付候筈ニ候へ共 左様自殺致し候儀ニ付非常之御含を以家各其俣御立被遣候間 家續

之儀者間柄方相願候様被 仰付候事

此度之一条ニ付而者骨肉之面と難黙止儀も可有之候得共 既ニ非常出格之 御含を以て其御所置被 仰付候 且方今變動且冬迫り御形勢ニ付 多分死士之命を其節迄御差延候 一廉之御用ニ御立被成度 思召之處 私之迷恨を以展腹復讐無数之壯士 今日ニ相果候而者国家臨時之御努ニ相成候儀 甚以 御残念ニ被 思召候間 此邊篤与勘弁致御為第一と相心得差止候様被 仰付候事

此度骨肉之面々其情態を以て悲歎之餘り進退極處ニ至可申与深察入候 此度之一条ニ付而者 中将様種々御配慮被遊 実以御寢食も不被安程之御次第 難黙止儀者尤之事ニ候得共 平生尋常ニ計らい被 仰付難く不得止事御場合 殊ニ方今之御時勢一卒と云共御大切ニ 思召候處 私之復讐止事無シテ天誅壯士数多死亡候事 御国之隊先弱り候儀 深く御残念ニ 思召 実以御苦心被遊候間 此度之儀者非常無御據臨時之御所置被 仰付候儀ニ付 其邊深く相心得忠節を第一と存格別相忍候之様可致 全ク即今之死を御差延 後日非常之場合迄一命を被遺候儀与存候間 御深慮を恐察致し 忠を以孝と可致様厚く及諭候人等此方ニ免シ厚く勘弁可致候 乍去元ハ忠節之心方掛る場合ニ及せる事ニ付 非常之以 思召家名其俣御立被 遊候事ニと存候得者其邊之處厚相考 格別相忍可申 此旨各親族之面と江も可申諭候事

伊勢守様御判

右者御諭之御書之写し 尤詰合之親族不殘被為召御直と御諭し有之由

脱走連中江被 仰渡左之通り

詫間半六

清水乙之丞

河田左久馬

同 清之丞

吉田直人

塩川孝治

次郎八二男足立八蔵

吉岡平之進

渋谷平蔵

同 金蔵

虎夫倅山口鎌之進

隼允弟加須屋右馬久

惣右衛門倅中井範五郎

佐善修蔵

永見和十郎

勘右衛門倅伊吹市太郎

辰之助倅大西清太

大太郎倅中野治平

太田権左衛門

金右衛門倅加藤助之進

其方共儀去月十七日之夜重き御役人共下宿江罷越し及斬殺候段 全ク 君上御大事之場合与存込身命を忘非常之及所行候段 於其志者尤之事ニ候 乍去重き為法憲御場所柄をも不憚御役人を斬殺し 良正院江立退御裁許を相待候段 其罪不輕候得共此度者非常之御含を以て當職之面々ハ家名其倅御立被遣候間 家續之儀者間柄方相願可申候 右ニ付一同先當所御屋敷江御呼返し急度慎被 仰付候間 嚴重相心得罷在候様被 仰付候

右者二十人也 今二人之内奥田万次郎御切腹之由 新庄恒藏御退身之由也 依て左之廿人者伏見御屋敷江御呼返しニ相成候由

一十九日

左之通り申通し

御家中御認簾背旗自分指物ニ至迄 白之短冊付候様 尤小具足陣羽織野腹等ニ而出張致し候之節者 先達而被 仰付候袖印相用様被 仰出候間 左様被相心得 此旨組中江も可有通達候 以上

猶以御軍式方頭殿江承合可被申候 且又組中江も可有通達候 以上

一廿日

左之両通申通し

来ル廿二日 御参内御當番日ニ有之 已後同日方五日目迄之御當番日ニ候間 左様被相心得 此旨組中江も可有通達候 以上

九月廿日

左之趣被 仰出候間 左様被相心得 此旨組中江も可有通達候 以上

九月廿日

御家中之面々勝手向難渋之向江者是迄簡略場ニ而役場限之見計を以當座御取替致し来候處 追々拝借高想高間ノ者即年差別立不申向も有之 彼は大枚之御貸高二相成り無據御勝手方御限繰出し取賄居申候得共 追々御限御繰合付不申処 此度物成りニ歩御返し被遣候儀ニ付 向後御貸渡し之儀者御差止被成候 尤実分差支候向者同所當時有限丈ケを以て少し宛之儀者役場限ニ取計可申候得共 身上不相應高御借之向候者御取替不被遣其内不時入用等無余儀訳有之面々及出願候者取調候上御取替可被遣候間 即年物成御支配を以て可致上納當御時節柄之儀者何れも相心得居候儀ニ付 万端厚く奉恐察 成丈ケ御役介筋相願申間敷事

一當節柄何れニ不寄ニ都御警衛詰等被 仰付候処 武器類質物ニ差入 金銀致借用居申

差懸り無據簡略場江拝借申談候向も有之哉ニ相聞以之外之事ニ候兼而被 仰出も有之儀ニ付 此後右等之儀相聞候ハ、双方取糺シ之上 品物御取上ケ急度御咎被 仰付候事

一廿三日

五ツ半時御供揃ニ而 御参内御供忝番組今日明ケ番ニ付 忝番組出張御出懸ケ備前様江被為 入候由

一廿四日

御供揃五ツ時ニ而御帰懸ケ備前様江被為入候ニ付 御先江御人数御返しニ相成り候由 本国寺江御引取昼九ツ半時

一廿六日 御参内

昨日方御番割改り 伊藤大砲相加り候之由

一廿七日

今日五ツ半時之御供揃ニ而御参内并ニ左之通り申通シ

當詰合御人数御取調ニ付 其方共始組中名前并ニ家来人数其品取分明日中可被申達候 此旨組中江も可有通達候 以上

九月廿七日

猶以諸取居申候御渡し手江人之儀者申達シニ不及候之間 左様被相心得 是又組中江も可有通達 候以上

右者組頭方書廻ス

今夕八ツ比方二条御城内出火ニ而先達而被仰出候通り 御本陣前江相固メ候得共 御當番御出張ニ付御所江罷出候様ニとの事ニ而大西初香河一手共出張 菊亭之前ハ相固メ御門内ニ而着到ニ而鎮火ニ付引取

一廿九日

今日飛脚到来致し桂宿師方左之趣被申越候由ニ付写置

宮城権之進殿

阪田猪太殿

鵜殿大隅

桂 六蔵殿

香河伊賀之儀此度隠居被 仰付候ニ付 同人組暫時右隊江御差置被成候間 左様被相心得 相組中江も可有通達候 以上

九月廿三日

今日細川侯御父子被為入早々御帰り 夫方 中将様二条殿江被為入候 御帰り暮六ツ時

○十月二日 但馬殿出立

今日御参内無之一手不残之出張ニ而菊亭江相詰ル并ニ左之通大西方組頭迄申来ル

香河伊賀儀此度隠居被 仰付候ニ付 同人一手組共 暫時遊隊ニ御置被成候間 左様可被相心得候 以上

十月

猶以組之面と江者御国表江相残居申面と方相組江も申通し候様申渡し有之筈ニ候
間 左様被相心得候 以上

一三日

今日四ツ時本国寺江引取御筒テীগキと引替

一四日

伊勢守様 御発駕

一五日

四ツ半時之御供揃ニ而尾州侯被為入 御帰り夜五ツ過

一七日

昨六日御當番日之所御番日相替り候趣ニ而人丸後番所繰上ケニ相成り 今日壹番組出番
左之趣相觸ル

御扶持方米之内御買上ケ代明八日御渡しニ相成り可申候事

一八日

御勘定所

五ツ半時之御供ニ而 御参内

一十一日七ツ時

中将様 御国江被遊御発駕候事

一十二日

御徒御供被 仰付京地出立致候事

一十八日 帰看致ス

山崎信敬